

## V 先島文化圏（宮古・八重山）の 無土器時代の遺跡

### 石垣島

#### 1. 四カ村内遺跡（石垣貝塚<sup>①</sup>）

かつて、市内の挑林寺裏通りの新川キダムリイから石垣ピイサガースムスクハカやナータジラバガの横道路の三ノ四号線にかけて数一〇点の磨製石斧、半磨製石斧、局部磨製石斧を拾ったことがある。それを一九五九年八月に早稲田大学八重山学術調査団が来島した際に調査団に寄贈した。寄贈した石斧は報告書『沖繩・八重山』（一九六〇年）の一五五頁「総合的所見」中に石垣市内採集品（大濱永巨寄贈<sup>②</sup>）と記載されている。石斧の製作の研磨技法などから見て無土器時代の石斧である。

#### 2. 磯辺貝塚<sup>③</sup>

磯辺集落の入口から磯辺川や宮良川にかけての地点貝塚であった。国道北側標高三ノ四メートルの低砂丘に形成されている。地層は黒褐色を呈し、食料残滓の貝殻などが多量に散乱しているのが見られた。一九六〇年頃に磯辺川の東側一帯で砂採取が行われた際に字石垣住の仲程信八氏

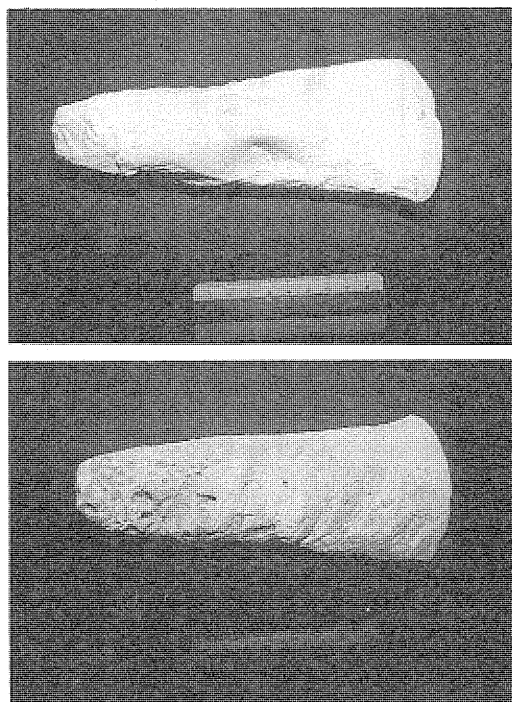


写真1 磯辺貝塚採集のシャコガイ製貝斧（表・裏）  
（所蔵者：仲程信八氏）

がシャコガイ製貝斧を一点採集している。磯辺川の西側は一九八四年、磯辺団地建設の際、調査されぬまま全壊した。

#### 3. 宮良ハママンガイ貝塚<sup>④</sup>

宮良川の東側河口、浜川原のヤラブ並木南側の海岸低地の砂丘に立地している。遺跡の中心部は確認されていないが一帯が黒褐色の砂層に覆われていて夥しい量の食料残滓の貝殻や焼石などが散乱している。敲石などが数点採集されている。

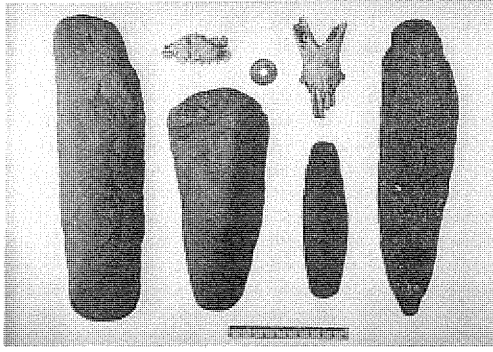


写真2 嘉良嶽貝塚群採集の敲石、局部磨製石斧、開元通寶、食料残滓のイノシシの骨

土地改良事業などにより客土され、また大部分が砂採取などの乱開発により破壊され地形が大きく変貌して凹地になっている。消滅寸前の貝塚である。現在はキビ畑になっているが、客土した赤土に混じって僅かに少量残滓の貝殻、焼石の散布を見ることができる。

この貝塚群では、大規模な砂採取などが行なわれていたのでその都度、市教育委員会や文化

#### 4. 轟川川尻貝塚

轟川川尻の木麻黄林から北側にかけての海岸低地砂丘に形成されている。嘉良嶽貝塚群の第一地点の貝塚である。

一九七〇年頃の土地改良事業の際客土で埋められた。その後盆栽用の土取りで破壊され、再度一九八五年頃の大規模な砂採取で全壊した。

#### 5. 嘉良嶽貝塚群<sup>⑤</sup>

南端の轟川川尻貝塚から、北端のカラ岳の南、スミヅ川にかけて海岸寄りの道路に沿った砂丘に形成された地点（列点）貝塚である。遺跡は

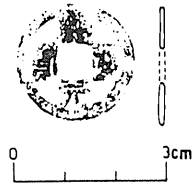


図1 開元通寶  
拓影・実測図

（沖縄県教育委員会「嘉良嶽貝塚」1992年、注9より）

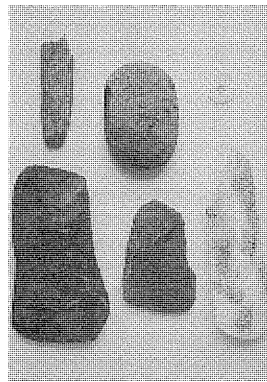


写真3 砂採取場の凹地跡から採集された、石斧、敲石、貝製装飾品、貝斧

二年初鑄）を一枚採集した。さらに、隣接の砂採取場の凹地跡からシャコガイ製貝斧、打製石斧、敲石を一点ずつ採集した。また、一九八九年八月二八日～九月一五日にはスミヅ川一帯を県教育庁文化課が試掘調査を行なった。調査の結果<sup>⑥</sup>、石斧、石皿、敲打器（敲石）、貝製品（螺蓋敲打器）などが出土した。その後の一九九一年、石垣市教育委員会によって再びこの一帯の全面発掘調査が行なわれた。報告書はまだ発行されていない。その後、砂採取でこの遺跡は全壊した。

#### 6. 通路川河口貝塚（通路川河口遺物散布地）<sup>⑦</sup>

ペーファマの東北側二〇〇メートルに通路川（トゥーリイカウラ）が

財パトロール委員などに連絡をしたが何の反応もなく放置状態にあった。

一九八九年五月、カラ岳の南東のスミヅ川河口

の貝塚群北端部を魚垣の会で筆者が中心になって調査した際に、焼石や食料残滓の貝殻などに混じって、局部磨製石斧、敲石を一点ずつ、また、薄手の銭貨「開元通寶」<sup>⑧</sup>（六

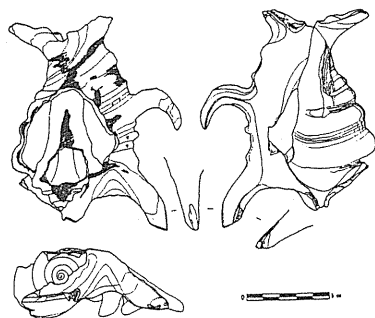


図2 船越貝塚で表面採集された  
スイジガイ製利器  
(沖縄県教育委員会『船越貝  
塚』1979年、注13より)

流れている。その川の河口一帯の海岸低地の砂丘に食料残滓の貝殻や焼石などが散布していたが砂採取などで全壊した。

### 7. 船越貝塚（船越遺跡）

伊原間集落入口と野底へ行く道の交差する付近の砂丘に形成された遺跡である。この一帯は「フナクヤ」と呼ばれ、その名の示すとおり、時化の時には東シナ海側から太平洋側に、あるいは、その逆に舟をかついで移動した所だという。遺跡はその「くびれ部」から南へ約五〇メートルの距離にあつて、すぐ南側の海岸が長田浜（ナータパマ）まで細長くのびて玉取崎まで続いている。遺跡の土層は黒褐色を帯びているものの、食料残滓の貝殻などの散布はあまり見られない。一帯には緑色片岩の大小さまざまな転石があつて石器材料に使用したものかと思われる。

一九七八年一〇月、石垣島一周道路（国道三九〇号）の改良工事の際、県教育庁文化課により発掘

調査が行われた。調査の結果、スイジガイ製利器一点、石斧二点（完形品二点、欠損品五点・未完成三五）、くぼみ石三点、たたき石一点などが出土した。また、石斧の製作技法や刃部の形態から石斧を部分磨製片刃

石斧（六点）、部分磨製両刃石斧（五点）、磨製片刃石斧（四点）、磨製両刃石斧（一点）、他不明の四類に分けて報告している。隣接地一帯からは中国製の玉縁白磁碗が一点採集されていることから無土器時代の終末期の遺跡だと思われる。

### 8. 嘉良川貝塚（吉野貝塚）

嘉良川の架橋から川沿いに一五〇メートル入ったところの一〜二メートル低砂丘地に立地している。一帯は貝層のためか黒褐色をしていて食料残滓の貝殻などが散布している。県の分布調査には吉野貝塚と記載されているが、吉野集落は戦後（一九五六年）、政府計画移民として再入植した村である。その際、村の再興を願う縁起を担いで日本の吉野という名称を集落名にしているので、ここでは遺跡名は地域で呼ばれている川名で呼びたい。現在の知見では人工遺物が少ない。隣接してマングローブなどが群生している。

### 9. 平久保ジーバ川河口貝塚

平久保集落から道路に沿って北へ一〇〇メートルほど行くとジーバ川が流れている。河口の北側の場所、両側を琉球石灰岩の崖に挟まれた低砂丘に立地していた。一九七八年頃には黒褐色で食料残滓の貝殻などがぎっしり積もった貝層があつた。その貝層の中から類須恵器（徳之島のカムイヤキ系陶器）数片と局部磨製石斧一点、敲石などを採集した。一九八五年頃平久保半島の遺跡巡検で行ってみると砂採取などで全壊して

10. 平久保ヤマトーラカーラ貝塚（平野後方第一遺跡<sup>16</sup>）

石垣島最北端の平野集落北側の一〜二メートルの海岸低地の砂丘に立地、貝層は黒褐色をしていて食料残滓の貝殻などが一帯に散布していた。一九九二年八月、八重山文化研究会（会長

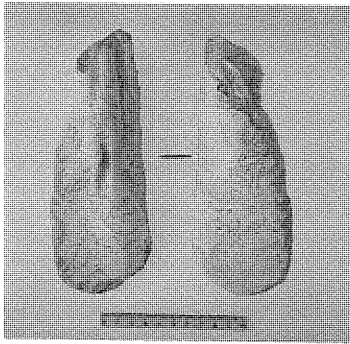


写真6 砂採取場の凹地跡採集の貝斧（表・裏）

いた。採集された類須恵器などから無土器時代の終末期の遺跡だと思われる。



写真4 砂採取で破壊されたジーバ川河口貝塚

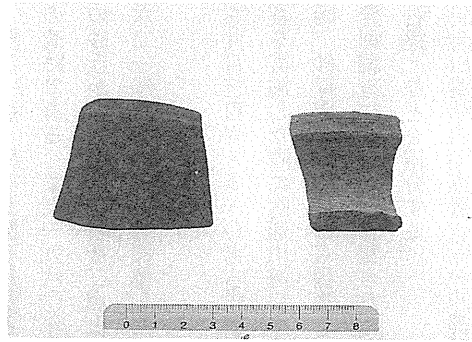


写真5 ジーバ川河口貝塚採集の類須恵器片

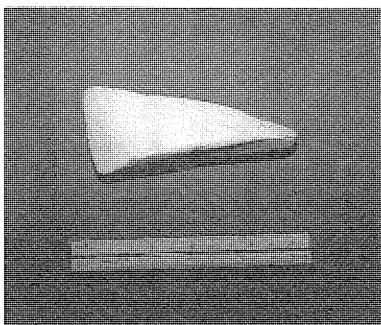
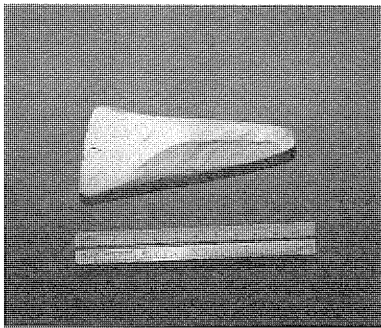


写真7 吹通川河口貝塚採集のシャコガイ製貝斧（表・裏）  
（所蔵者：石垣 繁氏）

吹通川河口貝塚は一九七七年一月、県道改良工事に伴う発掘調査で県教育庁文化課が主体になり石垣市教育委員会の協力を得て発掘調査が

11. 吹通川河口貝塚<sup>17</sup>（吹通川河口貝塚、吹通川河口遺跡<sup>18</sup>、吹通川第一貝塚・吹通川第二貝塚<sup>19</sup>）

市の天然記念物の指定を受けたヒルギ群生林がある吹通川河口の海岸低地の砂丘上に形成された貝塚である。以前、かなり広範囲に焼石、食料残滓の貝殻などの散布が見られたが現在では砂採取にあつて壊滅した。二〜三月後、再度、遺跡へ行ってみると全壊していた。

（石垣繁）の安良村調査の帰り、元平久保村（ムトゥペーブル）遺跡に寄った際に一帯で大規模な砂採取が行なわれていた。その砂採取された凹地跡から敲石とシャコガイ製貝斧（未完製品・刃部がすこし磨かれている）を一点ずつ採集した。早速、石垣市教育委員会にも連絡した。

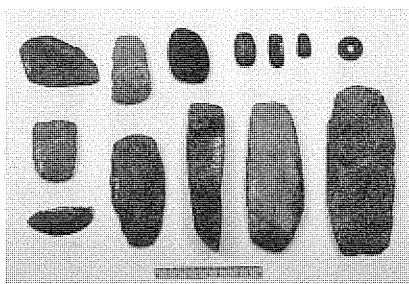


写真8 吹通川河口貝塚採集の磨製石斧、石包丁、小型磨製石斧、ミニチュア石器、開元通寶

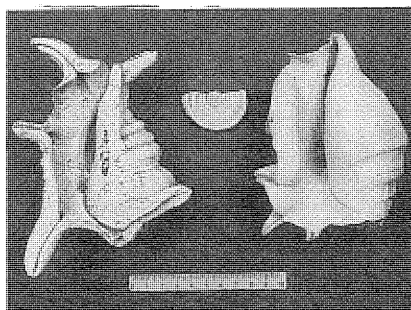


写真9 吹通川河口貝塚採集のスিজガイ製利器、クモガイ製利器、イモガイ製装飾品

行われた。

一九七八年九月、当遺跡の南側の砂丘の奥に隣接した琉球石灰岩風化層から無紋の厚い土器片が数一〇点、把手一点、局部磨製石斧などを採集した。時代の異なる赤色土器時代の遺跡である。また一九八〇年五月の遺跡巡見の際には無土器貝塚付近の砂丘から小型磨製石斧一点と石包丁一点、厚手の銭貨「開元通寶」(六二一年初鑄)一枚を採集した。

以下に、一九六〇年八月三一日から九月三日W・I・O考古学研究グループが徒歩で石垣島一周の遺跡調査を実施した際に吹通川河口の道路上から採集したものと、一九七二年頃、砂採取跡の凹地から採集したものと、さらに一九七七年一月の緊急発掘調査により表面採集されたところの石斧、敲石、大型の有孔石器(石錘)などを紹介する。

なお、これは『沖縄県石垣島吹通川河口遺跡の調査概要』(沖縄県教

育委員会・一九七八(昭和53)年三月三一日)からの引用である。

#### 一 石斧(図3の1~3)

図3の1は、短冊型で手に握れる手ごろな緑色片岩の礫を用いて、側面を敲打整形し、さらに緊縛しやすいように、側面に抉りの部分を作られている。胴部は自然面の一部を残して、刃部だけを研磨している。石斧の断面は楕円形を呈し、片刃である。石斧は平面形で見たところ刃線は円刃で、刃先は石斧として用をなさぬほど潰れ摩耗して丸みを帯びている。また使用痕跡が見られず、石斧として使用し、刃が潰れた後、敲くのに使われたものか、それとも水平に擦り、なめし皮用に再使用したものと考えられる。

図3の2は、頭部の一部が欠如しているがやや完形に近く、オモト連峰付近に露頭している手ごろな緑色片岩の石が素材で、刃部を丁寧に研磨している。胴部の表面には所々に研磨痕跡が見られるのみで製作は雑である。石斧を平面から見たところ、刃線は長軸に対して斜めであり、刃縁から見ると直線を呈している。使用の痕跡は判然としないが、刃部に向かうにつれて厚さは、漸次薄くなっている。断面は楕円形を呈し、片刃である。

図3の3は石斧の右半分が欠如したところの破損品であるが、その残存部より推して全面に研磨を施していたと思われる。石器製作のときの剝離面が見られ、石材は緑色片岩である。刃線はアヒルのくちばし状を呈するものと考えられ、片刃である。

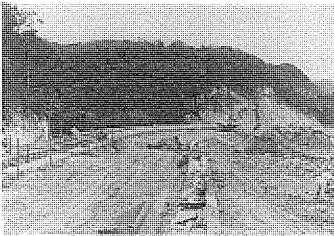
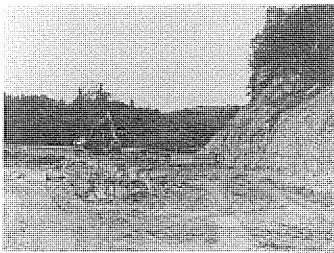
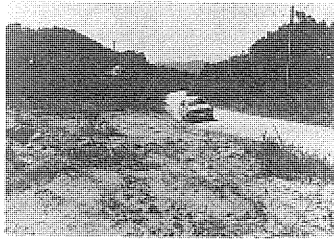
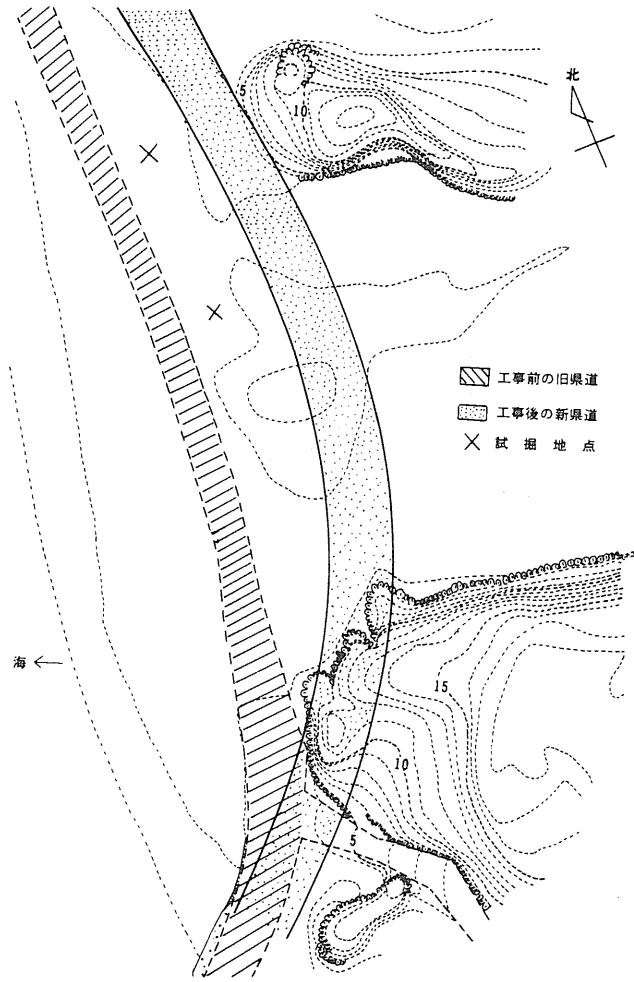


写真10 遺跡の近影



地図1 吹通川河口貝塚付近の地形図

石器番号	石器名	法量 (cm g)				石質	備考
		長さ	幅	厚さ	重さ		
1番	片刃石斧	10.3cm	3.9cm	1.7cm	155g	緑色片岩	完形
2番	片刃石斧	10.1cm	6.1cm	3.5cm	335g	緑色片岩	一部欠
3番	片刃石斧	9.2cm	1.8cm	1.4cm	40g	緑色片岩	半分欠
4番	敲石	29.4cm	9.3cm	5cm	2,540g	緑色片岩	完形
5番	有孔石器	35.0cm	20.6cm	5.3cm	6,360g	ビーチロック	完形
6番	有孔石器	26.3cm	25.5cm	5.4cm	4,740g	ビーチロック	完形

表1 石器類一覧表

(沖縄県教育委員会『吹通川河口遺跡の調査概要』1978年、注18より)

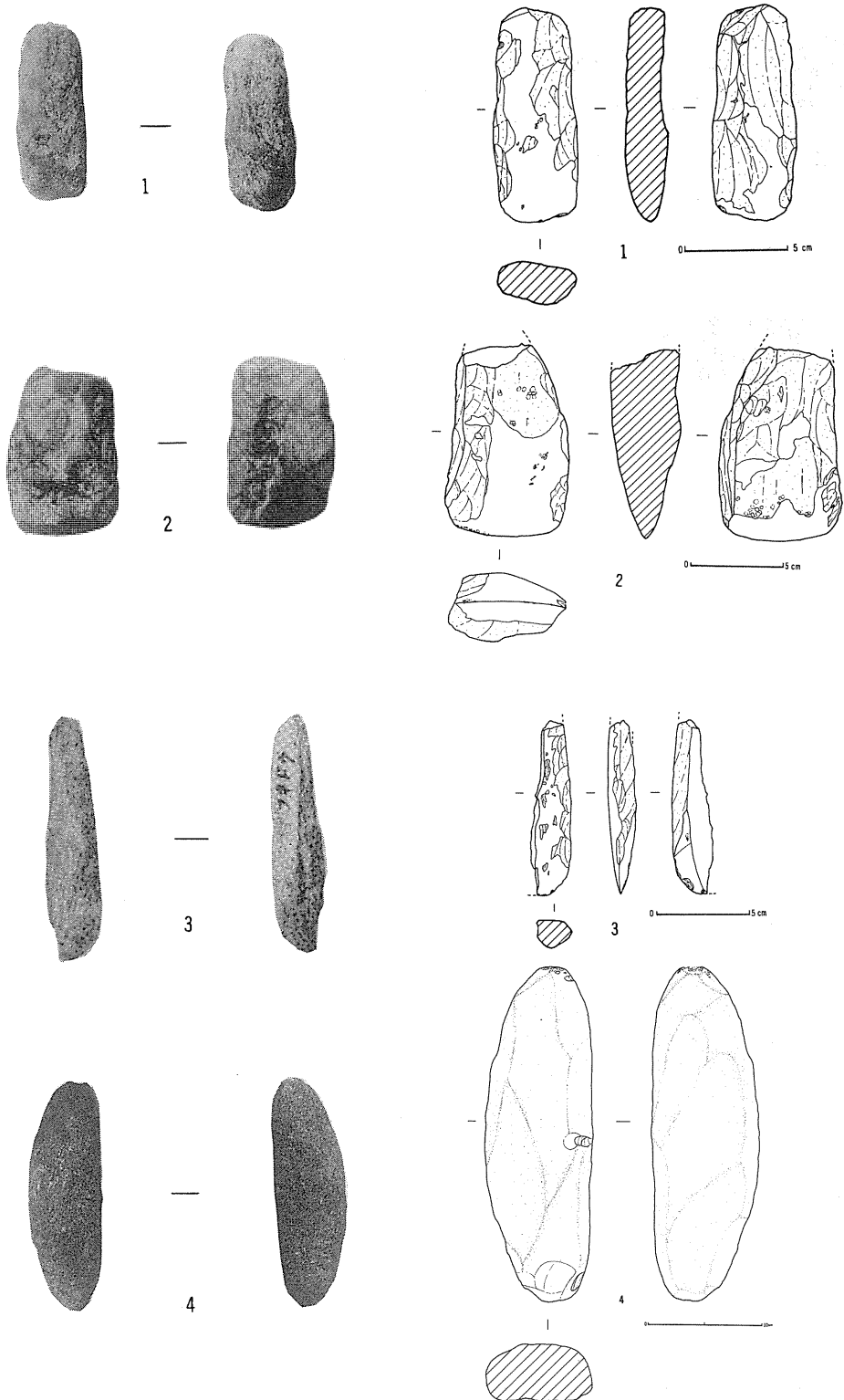


写真11（1～4）

図3 吹通川河口貝塚採集の石斧・敲石

（沖縄県教育委員会『吹通川河口遺跡の調査概要』1978年、注18より）

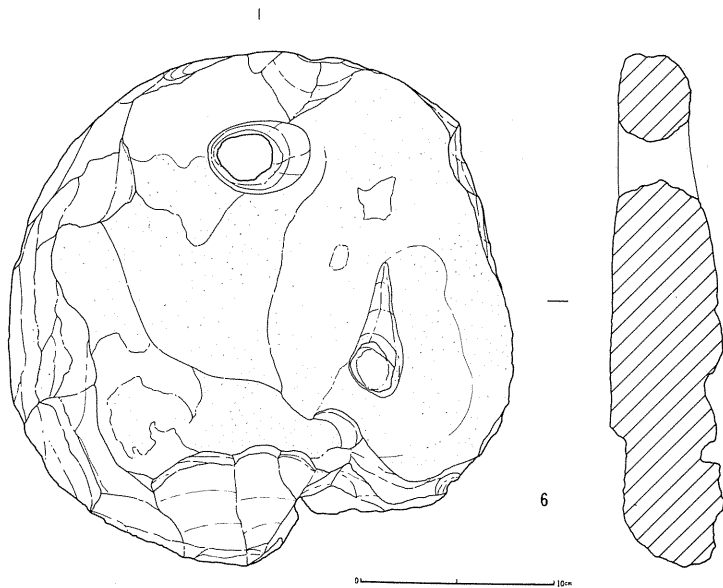
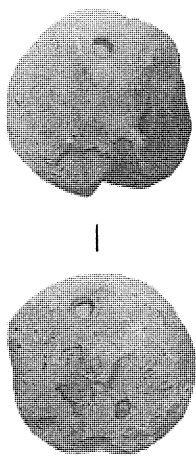
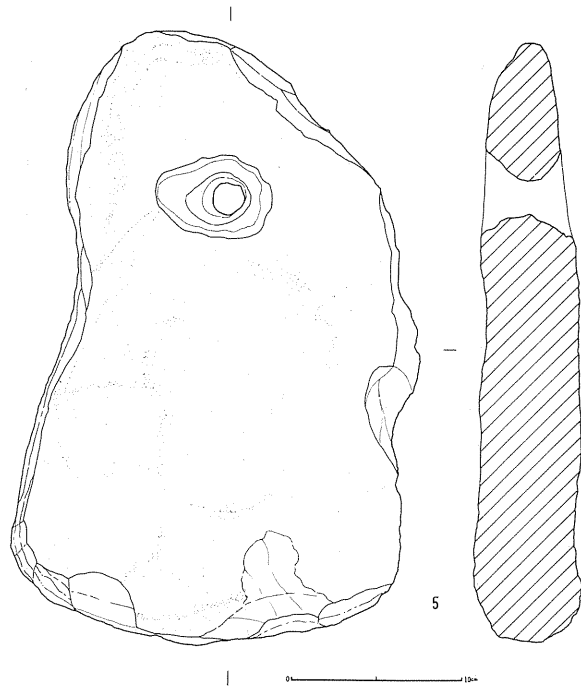
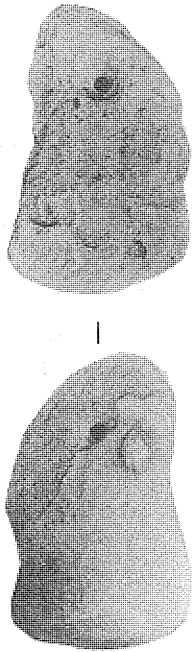


写真12（1～2）

図4 吹通川河口貝塚採集の大型の有孔石器（石錘）  
（沖縄県教育委員会『吹通川河口遺跡の調査概要』1978年、注18より）



二 敲石（図3の4）

図3の4は、石質が綠色片岩の棒状を呈する自然礫を用いたところの大型の敲石である。大部分は自然面に留めているが、頭部に敲打痕跡が微かに見られる。

三 有孔石器（石錘）（図4の1・2）

図4の1や図4の2は有孔石器（石錘）である。図4の1は、扁平板状のビーチロックの礫を長軸に沿って先端九センチメートルの所に両面から孔径七センチメートルの穴を穿っている。また図4の2も、ビーチロックの扁平板状の環状を呈する自然礫の先端から五・五センチメートルの下に両面から孔径五・二センチメートルの穴を穿っている。

図4の1、図4の2とも特殊な大型打製有孔石器で、両面の孔径は大きい孔内にすすむにつれて漸次小さくなって貫通している。

民俗例などから用途を参照すると、サバニ（舟）のイカシ（イカリ）の代用に使われたものか、それとも、スルシカー石（イカリ）の代用に使われたものか、それとも、スルシカー石（イカリ）の前まで魚の追込網のとき長い紐の先端に石錘をつけ、海底をたたきながら魚を追い込む漁撈用石錘として使用されたものか、或いは織物を織る際、地の目を整えるために使われる石錘なのかも考えられるが定かでない。

現在、沖縄本島の貝塚時代における比較資料が少なく、管見の範囲においては、八重山の名蔵貝塚群の類例があるのみである。今後

の詳細な研究を俟ちたい。

12. 浦底貝塚

浦底湾に面した旧大田集落のウラスク川河口一帯に形成された貝塚である。現在は原野になっていて貝殻の散布状況はわかりにくい、かつて畑であった時には地表面が真黒く見えるほど食料残滓の貝殻で覆われていた。

13. 仲筋ビューチイタ川河口貝塚<sup>30</sup>（仲筋遺跡、仲筋ビューチイタ川河口遺跡<sup>32</sup>）

県天然記念物指定文化財のニール御嶽の南、仲筋ビューチイタ川河口の海岸低地の砂丘上に形成されている遺跡である。近年、荒川からの農業用水路の建設などで一部が破壊されてしまった。

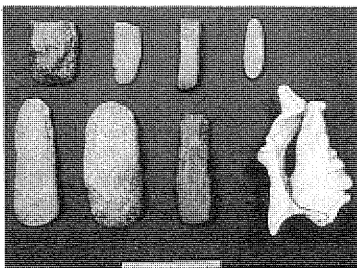


写真13 仲筋ビューチイタ川河口貝塚探集の石斧、スイジガイ製利器

一九八三年七月、石垣市教育委員会によって農地転用で緊急発掘調査が行われた。未報告ながら八月二四日の新聞によると「石斧が多量に出土 炉跡数カ所確認 農地転用で緊急発掘調査」の見出しで「海岸寄りの部分からは炉（ろ）跡が数カ所確認された。イノシシ、魚類を焼いて食べたとみられ、骨片がかなり出ている。遺物は石斧を中心に、約七〇

点出土した。短期間にしては数が多く、また、これまでにない特徴ある石斧も目立つと関係者は話している<sup>33)</sup>と、記載されている。また、九月七日付の新聞にも「石包丁など多数出土」の見出しで「遺跡は砂丘上にあつて過去に採砂が行われており、保存状態は良好ではないが、石斧や石包丁、敲(たたき)石などの遺物は七〇数点が出土するなどかなりの量にのぼっている。同遺跡は吉原集落の東側を流れるビューシタ川の河口にあり近くにニール御嶽がある。南側周辺には一六、一七世紀の仲筋遺跡、仲筋第二遺跡が見つかっている。河口遺跡は約四メートルの砂丘上にあり、広さは五千平方メートルある。(中略)島内の遺跡発掘調査は十分に調査研究は行われていないが、それでも八おびただしい量の遺物。こんなにバリエーションに富んだ遺跡は八重山では初めて(市教委)とにわかに注目を浴びている。年度内には調査報告書が出される<sup>34)</sup>とも、記載されている。報告書はまだ発行されていない。その後、砂採取などで全壊した。この貝塚の砂丘の奥には赤色土器時代のヒウツタ遺跡がある。

#### 14. 川平大兼久貝塚

川平集落の北へ五〜六〇〇メートルの市立川平浄化センター北側の海岸低地の砂丘に立地している。一九八一年六月、畑地の改良や砂採取で重機が入りその際にシャコガイ製貝斧や敲石などが採集されたので早速石垣市教育委員会に連絡したが、対応策がなされぬまま全壊してしまつた。

その件について新聞<sup>35)</sup>には、「新しい遺跡が発見されたきっかけは、市内宮良で飲食店を経営する嵩原正雄さんが去る二二日、花園づくりのため、業者に土砂を運搬させ、小石等を取り除く作業をしていたところ、その中から貝斧が出てきたもの。嵩原さんが知人の玉津博克さんに届けたため、土砂採取地の追跡調査がおこなわれ、新しい遺跡の存在が明るみになった。現地調査には、玉津さんのほか貝斧に詳しい大瀨永巨氏らが同行して付近一帯を下見した。その結果、焼石や広範囲にわたって巻貝や二枚貝等の貝殻が散布していることなどから、埋蔵文化財に間違いのない点を確認された」と、記載されている。また、『沖縄タイムス』にも「石垣市川平 砂地から貝斧出土 南方交流の貴重な資料 島で二〇四番目の遺跡」の見出しで「(略)石垣市教育委員会が二四日、付近一帯を調査したところ、広範囲にわたって埋蔵文化財の包含地域であることを示す焼石やシャコ貝、巻貝、二枚貝等の貝殻が散布、これまで知られていなかった遺跡であることが確認された。(略)日本列島の中で八重山、宮古の先島文化圏に限られて出土しており、南方文化との関わりを解明するうえで貴重な資料。石垣市教委では近く本格的な試掘調査を行い、県の遺跡認定を得たい<sup>36)</sup>」とも、記載されている。その後、砂採取などで全壊した。筆者も砂採取した凹地からシャコガイ製貝斧、敲石を一点ずつ採集した。

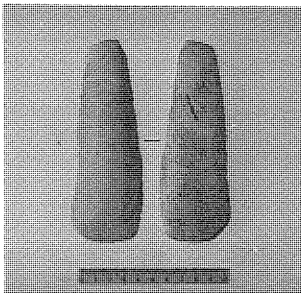


写真14 川平大兼久貝塚採集のシャコガイ製貝斧(表・裏)

15. 川平ザンドウ原貝塚<sup>37)</sup>（川平ザンドウ原第二貝塚<sup>38)</sup>）

川平石崎へ通じる農道を行くと、左手の方に底地湾がひらける。この湾に面した砂丘地一帯をザンドウ原と呼んでいるが、遺跡はその一角に形成されている。現在、この平坦地はキビ畑になっているが、かつては表土が露出していた部分で食料残滓の貝殻の散布を確認することができた。この一帯から両刃大型磨製石斧やスイジガイ製利器などを採集した。

川平ザンドウ原貝塚は一九八〇年五月、中村企業グループの保養所建設の際、埋蔵文化財包含地域として発掘調査が行われた。

調査の結果、未報告ながら新聞によると「川平、ザンドウ原貝塚群編年史の変更の可能性も 発掘調査終わる 八重山式土器出土で」の見出しで「市教育委員会は、先月中旬

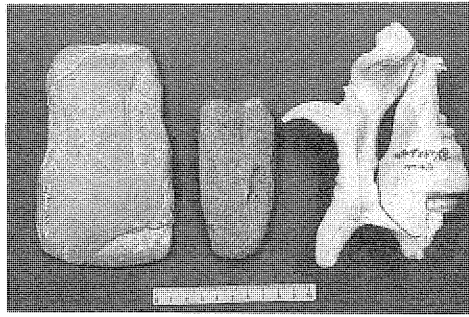


写真15 川平ザンドウ原貝塚採集の石斧とスイジガイ製利器

から川平部落底地（スクジ）海岸に面したところにある川平ザンドウ原貝塚群の発掘調査を進めていたが、二九日調査を完了した。同貝塚群は、貝塚の一部分が中村企業（本土在）グループの保養所施設建設予定地内にあるため緊急に調査を実施したもののだが、一時は川平部落の住民が企業誘致に反対し施設建設の阻止を訴えていた。しかしその後和解して企業側が調査を済むのを待つのみとなった。発掘調査は県教育委員会の協

力のもとで約二〇日間を要して進められ、多数のシャコ貝、八重山式土器、陶器などが発掘されている。特に、以前の調査の段階では貝殻、石器、土器片の埋蔵することが確認されたが今回の発掘調査で初めて陶器が出土したことで、従来考えられてきたいわゆる八重山編年第一期（最も古い時期に属する）から時代が下っての貝塚群ではないかと見られる。市教委によると、同貝塚の調査結果出土遺物の九〇%が貝殻類であるが、八重山式土器、陶器が出土したことによって従来の同貝塚群の位置付けの変更の可能性が出てきたという。同貝塚は、標高四〜五メートルの砂層からなり、特徴は当時の食生活の様子をうかがえる貝殻類が主に出土し、初の陶器が発掘されたこと<sup>39)</sup>などと、記載されている。

16. 川平底地原貝塚<sup>40)</sup>（川平ザンドウ原第一貝塚<sup>41)</sup>）

ザンドウ原貝塚の南、約二〇メートルのあたりを底地原と呼ぶ。その一帯の海岸低地砂丘上に形成されている貝塚である。現在はキビ畑になっているが、耕作の時に取り出された食料残滓の貝殻や石材片などが畑の畦に積まれていた。一九八九年八月六日、「サンゴ礁文化圏の自然生活誌―八重山・白保部落のイノリと暮らし」をテーマに梅光女学院大学國分直一教授と熊本大学白木原和美教授を招いて「八重山の古代文化について」の講演をしていただいた。その翌日、島内各地の遺跡を案内した際に大規模な土地改良により一帯に食料残滓の貝殻などが散乱している状況を新たに発見した。早速、石垣市教育委員会や県教育庁文化課に連絡をした。その後の砂採取などで全壊し消滅した。隣接する後方の



写真16 崎枝赤崎貝塚調査終了  
(石垣市教育委員会『崎枝赤崎貝塚』1987年、注46より)

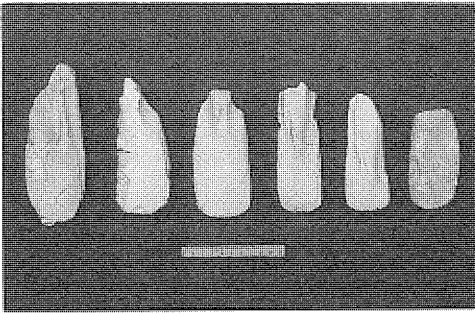


写真17 崎枝赤崎貝塚群採集のシャコガイ製貝斧

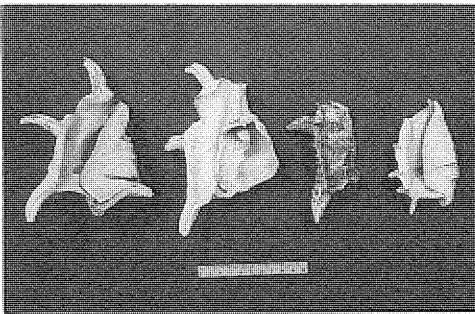


写真18 崎枝赤崎貝塚群採集のスিজガイ製利器、クモガイ製利器

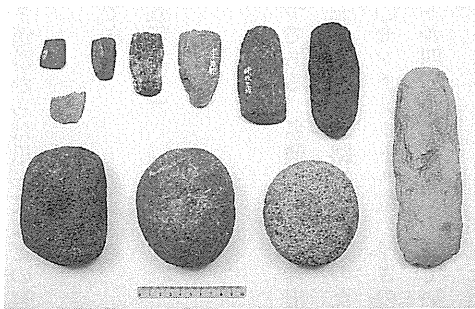


写真19 崎枝赤崎貝塚群採集の石器

琉球石灰岩丘陵には牧草整地の跡があり、赤色土器時代の川平ナータチビ遺跡<sup>43</sup>である。そこから土器の口縁や敲石、両端刃磨製石斧などを一点ずつ採集した。

#### 17. 崎枝赤崎貝塚群<sup>44</sup>（崎枝貝塚<sup>45</sup>）

屋良部半島の東南の岬・赤崎から西へ四〇〇メートル行くと海岸寄りの標高二〜三メートルの低砂丘が西のフミダ川まで続いている。その低砂丘の所々に黒褐色の貝層が見られる。地点貝塚である。

この貝塚の西端フミダ川の河口を石垣市教育委員会が、一九八五年八月一日〜三〇日に第一次発掘調査、翌年九月一日〜一〇月一五日に第二次発掘調査を行った。調査の結果、打製・局部磨製石斧五二点、すり

石六点、石錘（イカリ石）、石包丁、石製品が一点ずつ。貝器はスিজガイ製利器が八点、シャコガイ製貝斧二点、貝製裝飾品（イモガイ科）四点。特に注目すべきことは第Ⅱ層の直上からままとまって銭貨「開元通寶」（六二一初鑄）が二七枚、そして第Ⅰ層から六枚の計三三枚が出土したことである。

この遺跡の東一帯はかつての崎枝村跡地である。食料残滓の貝殻や焼石、そして時代が異なる崎枝村当時の日本陶器、琉球南蛮、地元荒焼・土器なども採集されている。筆者も地表調査の際に、キビ畑からシャコガイ製貝斧六点、スিজガイ製利器二点、クモガイ製利器一点、敲石、石錘一点、磨製石斧、半磨製石斧などを採集した。当貝塚後方の洪積台地には赤色土器時代の崎枝赤崎遺跡がある。

18. サーカーラ河口貝塚

屋良部半島の北海岸のサーカーラ河口の海岸低地砂丘に立地。一九九七年一月、字新川在住の大浜守哲氏から砂採取場の後から石斧一点を採集したという通報があった。早速、氏の案内で現場へ行った。既に砂が採取され、貝塚としては無残にも全壊消滅<sup>(48)</sup>して赤土が客土されていた。周辺を綿密に地表調査すると焼石や食料残滓の貝殻に混じってジュゴンの肋骨を利用した骨製刀器・敲石などが採集された。当貝塚については既に多和田真淳氏が「(略)現在の崎枝部落の近くの北海岸畑地にも貝の散布地があるが新しい様である<sup>(49)</sup>」と、報告している。サーカーラの東側の岬にはスク時代の崎枝カサザキ遺跡<sup>(50)</sup>がある。

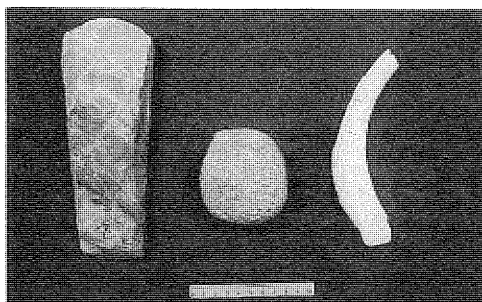


写真20 サーカーラ河口貝塚採集の石斧・敲石・ジュゴンの骨製刀器（石斧提供者：大浜守哲氏）

19. フーネ第二貝塚（フーネ遺跡群—フーネ第二遺跡<sup>(51)</sup>）

名蔵湾にケーラザキ岬があり、そこから道路に沿って北に八〇〇メートル、フーネ川の支流脇の丘陵が海岸の低湿地帯に接する所に立地している。一九七七年一月一六日に筆者と新田重清氏らは共同の試掘調査を行なった。黒褐色貝層から食料残滓の貝殻、獣魚骨や石斧などが検出され、遺物包含層であることが確認された。直ぐ後方の丘陵には赤色土

器時代のフーネ遺跡がある。このフーネ遺跡からは爪形文などの有紋の赤色土器<sup>(52)</sup>などが発見された。

当貝塚の炭素14年代測定は次の通りである。

・九六〇±七五年BP（九三〇±七五年BP）

20. 名蔵神田貝塚（名蔵神田原貝塚<sup>(53)</sup>）

名蔵貝塚群の延長上の地点貝塚の一つである。名蔵川中流の神田橋のたもとの砂丘に立地している。一九六三年三月に道路拡幅工事のために一部が破壊されたが、表土層の下に三〇センチメートル位の厚さの貝層が堆積していた。この貝層は二〇メートル四方にわたってのびていて、

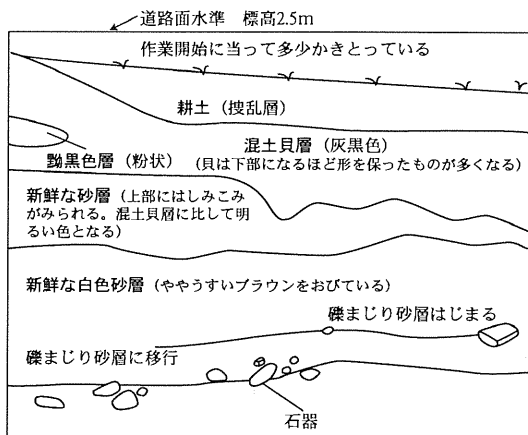


図5 道路面水準、標高2.5m

石垣島名蔵平地、神田橋付近旧神田貝塚近接地区のボーリングによって明らかにされた層序的状况（國分直一「八重山先史系土器とその北上の形跡—安里嗣淳氏の批判に答える」1975年、注57より）

東側と南側で薄くなっていった。現在は、付近一帯の土地改良事業のために整地や客土などが行なわれ、貝塚は壊滅状態にある。

一九六二年、リチャード・

ピアソン氏が道路の南側で試掘調査を行った。筆者も試掘調査に協力した。

また、翌年三月、筆者は道路の北側を國分直一教授とともに試掘調査を行った。試掘調査の結果、國分教授は、「八重山先史系土器とその北上の形跡」のなかで次のようにのべている。

「神田貝塚は大濱永巨氏が調査されている。同氏からレンズ状の露層を見せている貝層の写真をいただいた。現在は道路の開発によって貝塚は消滅している。大濱氏の採集資料によると、厚手のピラ型のややアツズ傾向の石器が出土している。筆者は、貝塚が消滅した後であるので、調査のしようがなかった。その地区の地層の状況を、ボーリングを試みることによって確かめたいと考えた。その地区には背後に名蔵礫層が台地状に残り、礫層をとりまいて低湿地がひろがっている。礫層の西側台地縁は崩壊土によって形成されたならかな斜面をなし、甘諸畑となり、そのはずれに新開の道路があり、道路を越えると、海岸まで低湿地がひろがる。かつての神田貝塚は台地真下の、古い礫層の崩壊面に形成されていたと見られる。ボーリングは甘諸畑の下縁末端部において行なった。攪乱された耕土の下に混土貝層があった。神田貝塚と関係のある層かと考えられたが、遺物は見出されなかった。その下方は新鮮な砂層となり、砂層がつきると角礫をふくむ礫層になっていた。波に洗われた礫浜であった時代が遠古の時代であったことが考えられる。その礫浜に、半身をうめて一部に微弱な磨研の加えられた粗造の石器がのっていた。標高一・五メートル前後である。そこで筆者が思い出したのは九州や山陰の一部

における曾畑式の出土する海辺遺跡である。一例であるが下関梶栗浜遺跡は標高三・五メートルの砂丘地に立地している。その上層には弥生前期の埋葬遺跡がある。堆積砂層を一・七メートル掘り下げると海進期に波に洗われたと見られる礫浜がひろがっていて、その直上に条痕の顕著な甕型土器（曾畑式）がのこされていた。底部が安定のいい丸底であることから見て、また立地状況から見て、早期的相貌を示す土器であるが、登場した時期は縄文海進と関係ある時期でなからうかと考えている。そ

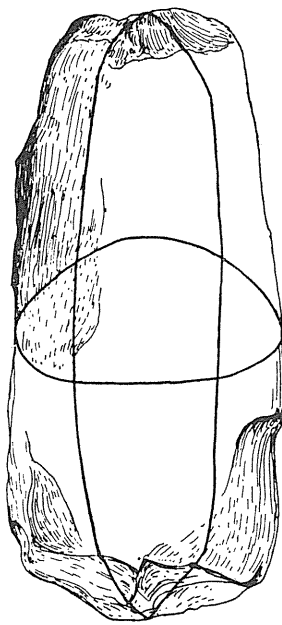
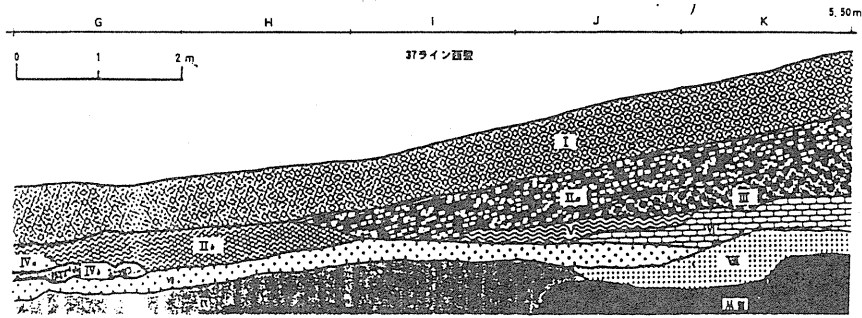


図6 石垣島神田貝塚出土石器  
全長17.5cm 最大幅8cm  
最厚4cm 暗緑色の変成岩使用  
(國分直一『南島先史時代の研究』  
1972年、注55より)

の地点の標高は約一・八メートルであった。梶栗浜における古式の縄文土器登場の状況と名蔵地区神田貝塚附近の石器登場の状況とを縄文海進期、あるいは海退の開始の時期との関係において考えられないかと思つた。(中略)八重山における石器登場の時期が、ひどく降る時期のものでなく、むしろ想定されていたよりも古い時間の深さを持つものであると考えていることを示したかったのである」と、詳しく述べている。また、國分教授は、「Ⅱ 石垣島の石器」の項で「貝散布地の一部を

図7 神田貝塚37ラインの層序へ大田原遺跡（Ⅷ層）と神田貝塚（Ⅱ<sub>a</sub>、Ⅳ<sub>a,b</sub>）の層位的な関係

（沖縄県教育委員会『石垣島県道工事に伴う発掘調査報告』1980年、注59より）

試掘したところ、貝層下に無遺物をはさんで礫層の表層に陥入して黒い青緑色の重厚な石器が発見された。背面は自然礫面を利用し、他の面は大きく剥離されているが、極めて一部に磨研が加えられている。長軸の両端に加撃のあとがあり両面から加撃して剥離を加えたものである。剥離のあとが階段状に見出される。工作に使用する刃部をなすと見られるが、磨研がななくきわめて粗造の造形のままである。貝層にも土器は見出されない。この層は貝塚形成前の礫層―おそらく水辺であろう―であることから、この石器は層序的に把握されたものとしては、石垣島におけるもっとも古層の石器といつてよからう<sup>(59)</sup>とも、述べている。

一九七八年、県教育庁文化課によって緊急の発掘調査が行われ、

調査の結果、遺物では打製石斧、局部磨製石斧、半磨製石斧、磨製石斧、すり石、敲き石、杵状石器、有孔石器（石錘）、石皿などが出土した。また、報告書の「Ⅱ 大田原遺跡―Ⅴ 総括」の項で「本遺跡と神田貝塚の層が重なり合っている三七ラインで逆転した。神田貝塚の層より下に大田原遺跡の層が堆積しており、そこから下田原式土器が検出されたのである」と、報告している。丘陵の大田原遺跡と直下低地砂丘の神田貝塚の層位関係が確認された。

また、前述した筆者と國分教授の共同試掘調査の際、最下層の一メートル掘り下げた各礫層は大田原遺跡の層だということが分かった<sup>(60)</sup>。本遺跡の炭素14測定の結果は次のとおりである。

- 一二七〇±八〇年BP（第Ⅲ層の木炭）
- 一五四〇±六五年BP（第Ⅲ層のシャコガイ）
- 九四〇±六五年BP（第Ⅳ層のシャコガイ）

#### 21. 名蔵神田第二貝塚

一九五九年に筆者が発見し、一九六二年頃の道路の拡張工事や埋め土の土取りなどで全壊した貝塚である。大田原（神田原）遺跡の立地している舌状の神田丘陵のゆるやかな斜面に開かれた道路の地表（舗装）面上の一〇～二〇センチメートルには地山の粘板岩があり、その上に一メートルの黒い包含層（残滓の貝殻・焼石・石斧）が奥行き五～六メートル、東西幅の約一五～二〇メートルにわたり広がっていた。この貝層の後方、比高差として三～四メートル上には名蔵礫層があり、この礫層が大田原

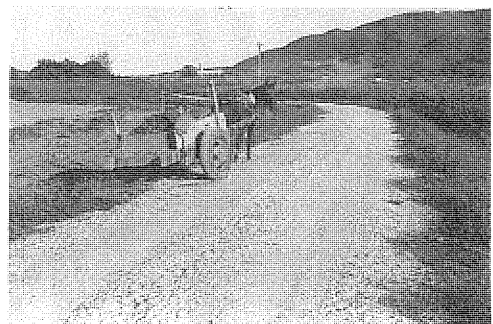
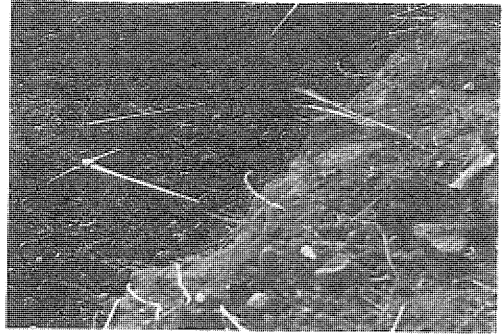
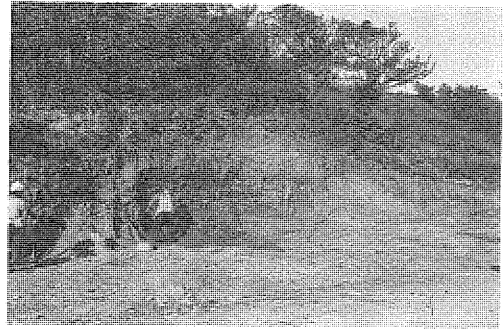


写真21 神田第二貝塚の破壊状況（1962年頃）



遺跡の先端部であった。層位的にいうと大田原（神田原）遺跡の下にこの名蔵神田第二貝塚があった。この一メートルの包含層も東に行くとも薄くなり途切れていた。直東側の地表面下の畑の砂丘には神田貝塚が立地していた。神田第二貝塚の貝層は丁度洪積台地の岩陰に押し込むようなかたちであった。今のところ何らかの自然の地殻変動で台地の縁端部が崩壊して滑り落ちたのか、また約四千年以前に貝塚の形成があったのか、また、神田貝塚、大田原遺跡の両遺跡と本貝塚との関係は不明である。

## 22. 名蔵白水貝塚<sup>62)</sup>

於茂登山の麓、名蔵集落の後方白水の水田地帯に形成された貝塚である。名蔵川の支流である白水川の上流は於茂登山の麓の奥までのびている。この貝塚は白水川上流に沿った水田の一角に形成されていた。貝層が厚くてもみごとな貝塚であったが、一九六二年頃の土取りや土地改良事業などによって破壊されてしまった。

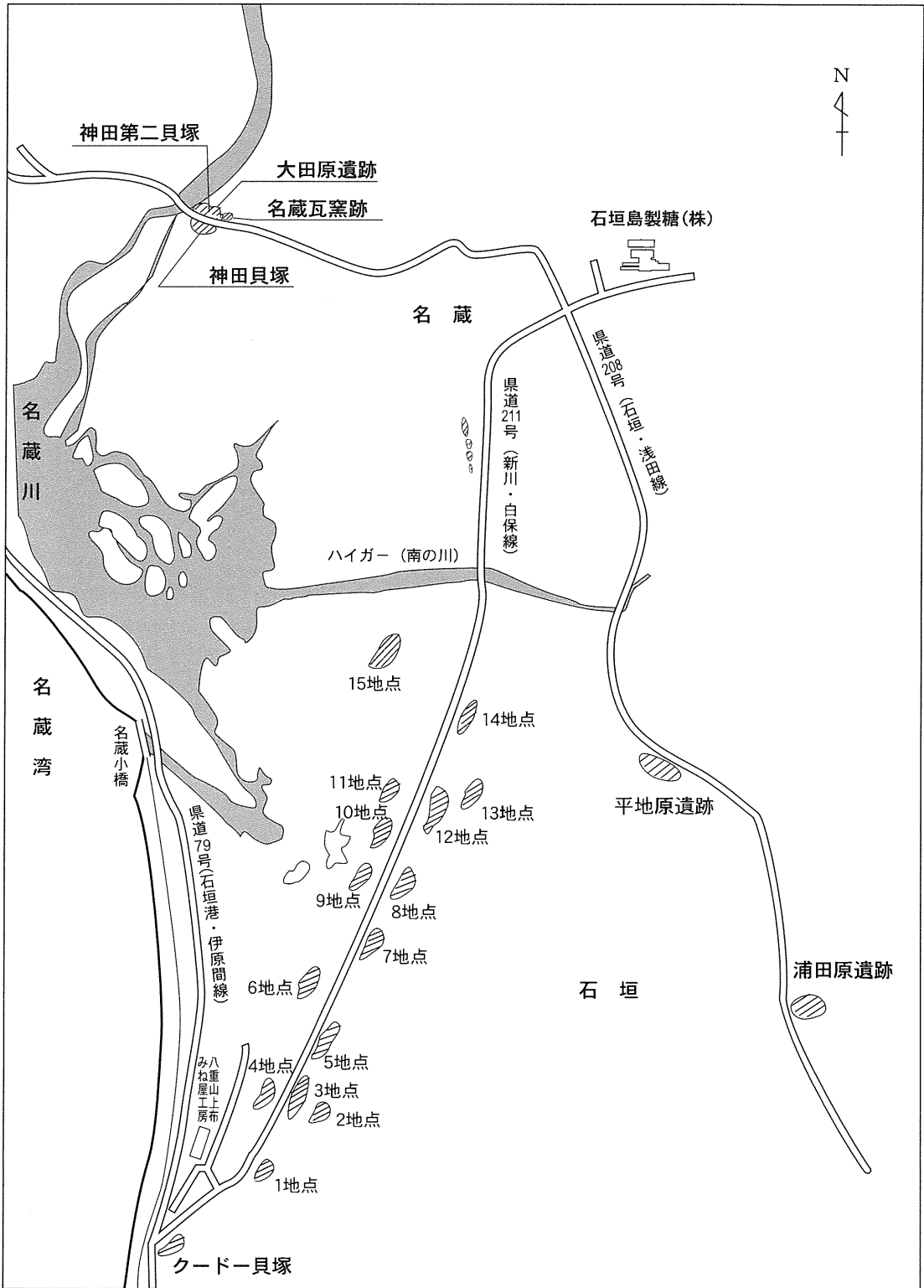
## 23. 名蔵貝塚群（名蔵第一貝塚・名蔵第二貝塚・名蔵第三貝塚）<sup>63)</sup>

市街地から北西に約四キロメートルのところに名蔵湾があり、一帯の浜をクードウ浜と呼ぶ。直進すると川平、右折すると名蔵集落へ向かう三叉路を名蔵集落行きに一〇〇メートル行った地点から、道路に沿って延々と低砂台地が湿地帯を挟んで二キロメートル余り、名蔵川の中流の神田貝塚付近まで続いている。また、神田貝塚の直後方台地には赤色土器時代の太田原（神田原）遺跡が立地している。

この標高二〜三メートルの砂台地には、自然堆積層の海砂利層（白黄色層）や腐植土層（黒褐色層）、そして包含層（黒色層・生活層）などが入り組んで点在する。その点在する包含層を一五地点確認できた。この貝塚群の面積は数千平方メートルにも及ぶ大規模な地点（列点）貝塚である。中心部は道路によって破壊されていると考えられるが、道路沿いのキビ畑の広い範囲に貝殻や焼石などがみられ、多くのシャコガイ製貝斧が第二、第一三の地点から、また、石斧が第三の地点からまともに発見された。最近、農業の機械化が進み、表土下数センチメートルに埋まっている遺物包含層の一部が耕作の都度にトラクターなどで掘り返されることが多い。破壊の危機にある貝塚である。

一九八〇年、県教育庁文化課が主体となり圃場整備事業としての「名蔵貝塚群の範囲確認調査」が行われた。調査の結果<sup>64)</sup>、石斧五点、有孔石製品、シャコガイ製貝斧二点（未完製品）、スイジガイ製利器三点、有孔貝製品（シャコガイ製品・サルボウ等製品・タカラガイ製品・その他の巻貝製品）などが出土した。

また、一九八四年九月、道路拡張工事に伴う緊急発掘調査が県教育庁文化課によって行なわれ、調査の結果<sup>65)</sup>、土器一〇片、石斧九点、たたき石四点、シャコガイ製貝斧二点、スイジガイ製利器二点、タカラガイ製品、二枚貝有孔製品（シャコガイ有孔製品・メンガイ有孔製品・シレナシジミ有孔製品・リュウキュウザルガイ有孔製品・カワラガイ有孔製品・リュウキュウサルボウ有孔製品）、巻貝有孔製品（アンボンクロザメ有孔製品・イトマキボラ有孔製品・クモガイ有孔製品・リスガイ有孔製品）



地図2 名蔵貝塚群の各地点と周辺遺跡の分布図



写真22 露出した貝層

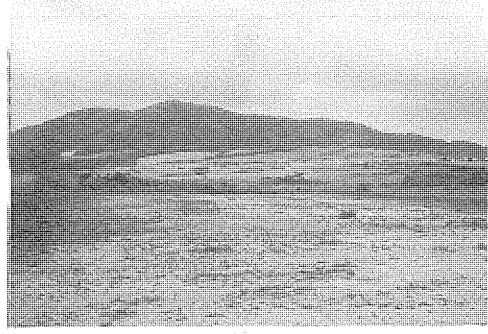


写真23 遺跡の近影

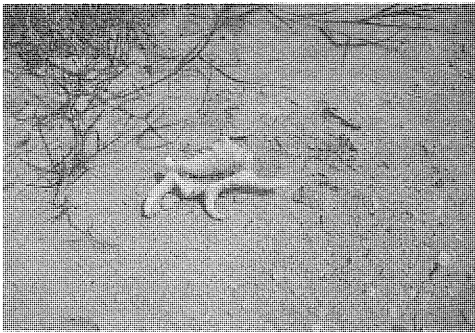


写真24 砂採取場からのスジガイ製利器の発見状況

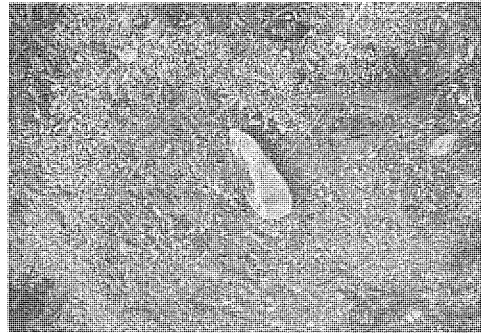


写真25 砂採取場跡採集のシャコガイ製貝斧

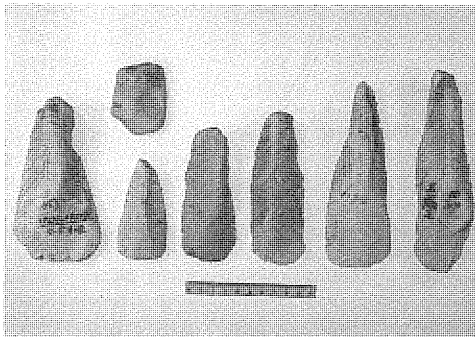


写真26 第2地点採集のシャコガイ製貝斧

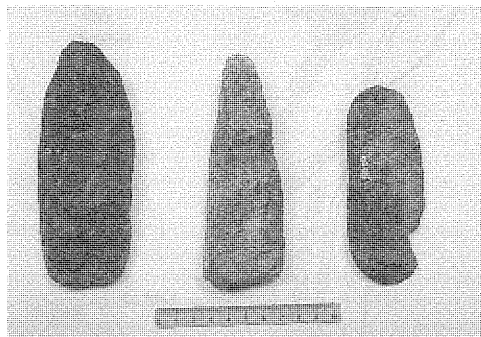


写真27 第1地点採集の局部磨製石斧

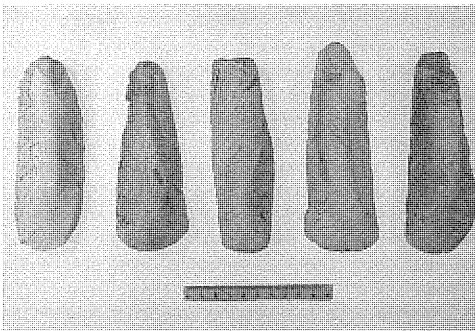


写真28 第2地点採集シャコガイ製貝斧

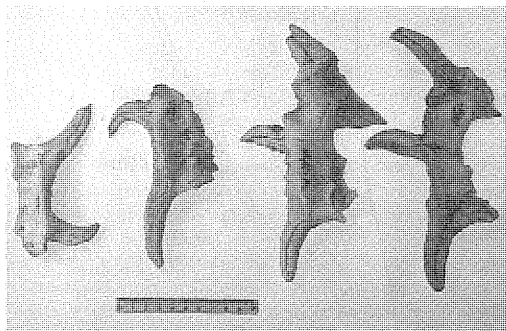


写真29 第2地点採集のスジガイ製利器

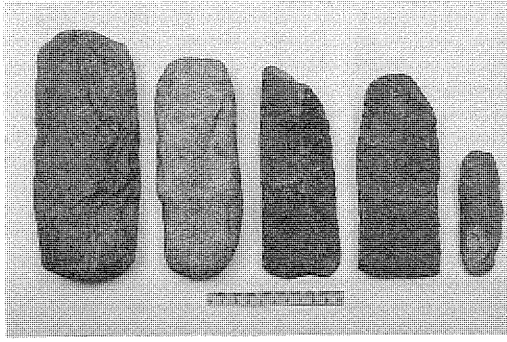


写真30 第4地点採集の打製石斧・敲石

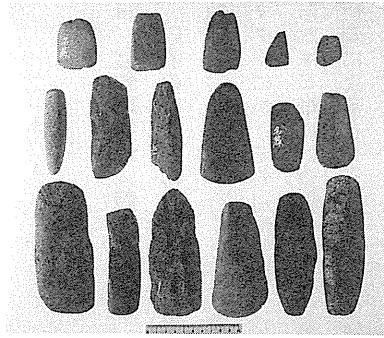


写真31 第3地点採集の石斧

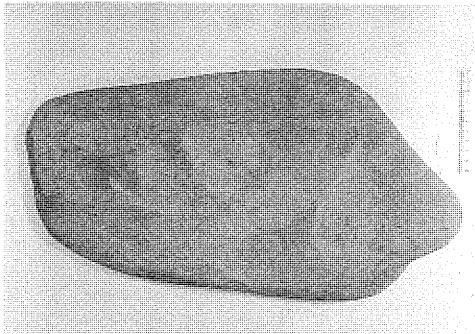


写真32 第8地点採集の有孔石器（未完成品）

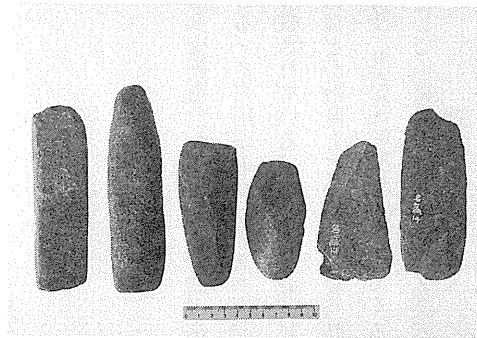


写真33 第12地点採集の石斧

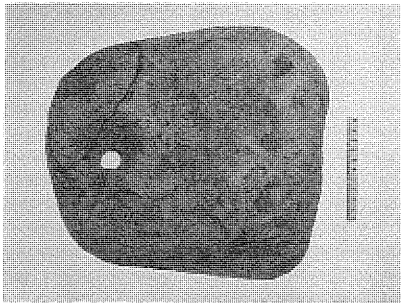


写真34 第12地点採集の有孔石器

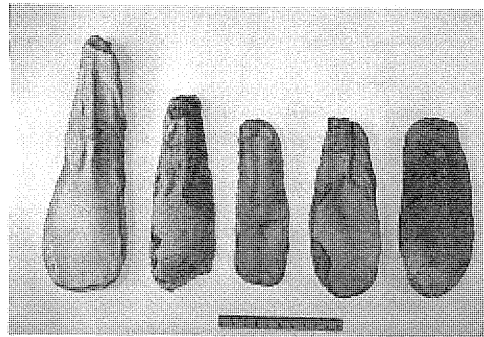


写真35 第13地点採集のシャコガイ製貝斧

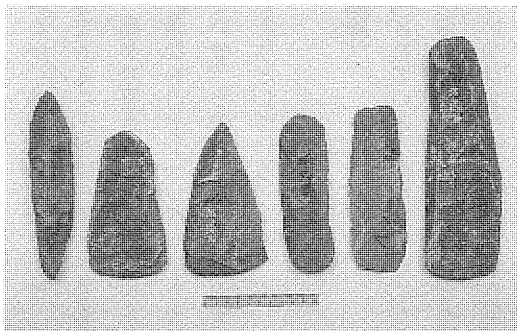


写真36 第14地点採集の打製石斧、局部磨製石斧

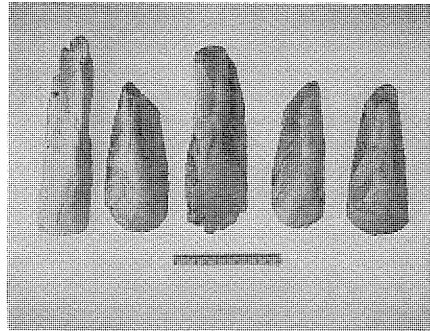


写真37 第13地点採集のシャコガイ製貝斧

などが出土した。

一九九〇年頃から名蔵貝塚群一帯で虫食いのように大規模な砂採取が何回も行なわれている。遺跡が攪乱しているという理由で、最低限の行政行為としての記録保存の調査も行なわれなかった。その結果、貝塚群の中心部の第二、第三の地点の大部分、そして、一二月には第八の地点の中心部及び第一二の地点も完全に破壊された。

これまでの炭素14測定法による測定結果は次の通りである。

・名蔵貝塚群第二の地点（筆者第三の地点）

九四五±七五五年BP

九二〇±七五五年BP

・名蔵貝塚群第五の地点（筆者第二二の地点）

二二〇〇±九〇〇年BP

二一四〇±八五五年BP

#### 24. 富和底貝塚（野呂水貝塚）

以前の市指定の露天チリ焼場（野呂水交差点）から観音崎方向、南へ約二〇〇メートル行くと野呂水川がある。この川からファースク川、クマダ川にかけての海岸低地の砂丘に形成されている。かつて名蔵湾に面したキビ畑には食料残滓の貝殻や焼石などが散乱していた。発見当時の新聞によると、「名蔵湾近くで貝塚発見―九百年前の石おの出でくる―連合区の島村指導主事が」という見出しで「発見された貝塚は名蔵湾の南海岸俗称クードーにある砂糖きび畑。島村指導主事の説明によると、

一カ月前、釣りにいった際に気づいたが、時間がなかったので、去る一五日あらためて調査に出かけ、貝塚であることを確認するとともに現場から堅い閃緑岩とみられる石おの一個が発見された。一帯は一八一平方メートル（二五〇坪）以上に及ぶ広域なものでシャコ貝やタカセ貝等の貝殻も発見された」と、記載されている。その後、盆栽用の土取りや道路の拡張工事などで破壊され消滅しようとしている。

#### 25. 富崎貝塚（富崎貝塚、観音崎遺跡）

富崎観音堂の南側砂丘一帯に形成されている。現在は畑地になっていて耕作されているが、耕作土の中から磨石や局部磨製石斧などが発見されている。貝層や遺跡の中心部についてはまだ確認されていない。早稲田大学八重山学術調査団（代表滝口宏）の報告書の中の「八重山考古学・結語」中、「三、観音崎遺跡」の項では「（略）観音崎というその丘は大部分が公園に指定されているが、その南部開墾地から石斧が出土した。現地踏査では十分このことが判らなかつたが、遺跡地として考えることができる」と、述べている。

また、一九六〇年八月一三日の

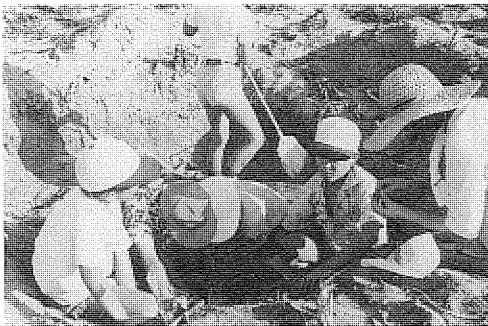


写真38 手弁当で行われた試掘調査

新聞には「石垣島の居住者 宮良川上流が起源 滝口教授らの調査」の見出しで「滝口教授の話 (中略) 最も興味のあるのは観音堂の南側海岸で石堂八重山図書館長が砥石や石斧などを発見していることだ」とも、記載されている。一九六二年三月三十一日の新聞にも「富崎村の貝塚発掘―新川の仲本さんが自力で六百年前の部落」という見出しで紹介され、石斧や砥石などが発見された。

この一帯に土地改良の申請があったので、一九七七年四月一六日、一七日の二日間、石垣市教育委員会が音頭をとって、筆者を中心にして一般の八重山文化研究会や沖縄県歴史教育者協議会八重山支部の会員ら六名、高校生二七名、小学生六名の計三九名が手弁当での試掘調査を実施した。単一層で食料残渣の貝殻などに混じって局部磨製石斧一点が出土した。また、地表調査の結果、一帯から敲石、石皿などが採集された。出土品は八重山博物館に活用を依頼し保管した。一九八九年頃この貝塚もごく一部だけが残され砂採取によりほとんどが破壊した。その後、残された砂丘部分を石垣市教育委員会が発掘調査した。報告書はまだ発行されていない。その後全壊消滅した。この砂丘のすぐ後方の礫層から、筆者は局部磨製石斧、磨石、



写真39 遺跡の破壊状況

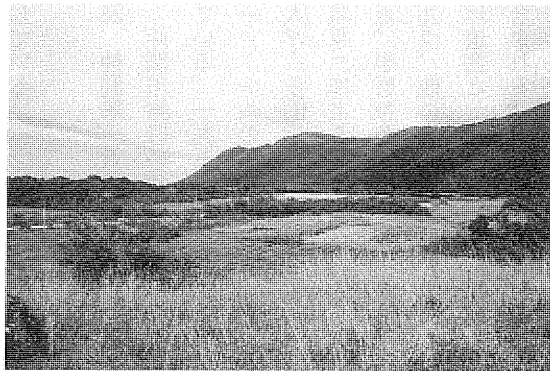


写真40 南風見貝塚群の遠景

西表島

26. 南風見貝塚群(南風見田貝塚<sup>31</sup>・南風見貝塚<sup>32</sup>)

シャコガイ製貝斧、数点の厚手土器片、把手を採集した。赤色土器時代の富崎遺跡<sup>29</sup>である。また、この一帯から近世の地元産の荒焼の摺り鉢、水甕などの破片も採集される。一七七一年の大津波後の寄人により竹富島からこの富崎一帯に移った富崎村の跡(一七八五年村建)だと思われる。

岸線まで連なっていて所々に小川が流れている。パイメーターヌカーラ(川)からシタダレーヌカーラ(川)の小川間の狭小な海岸低地の砂丘に形成されている。農道を挟んで約二〇メートルにわたる広範囲に食料残渣の貝殻や焼石などが露頭している。地点貝塚である。一帯から薄い土器片が採集できる。筆者は一九七八年西表遺跡巡検の際に、シャコガイ製貝斧(未完成品)と局部磨製石斧と青磁の口縁を各一点ずつ採集した。

して「竹富町が西表で計画している団体営・農道整備事業に絡み、去る一四日から発掘に入った△南風見貝塚▽の発掘調査が二三日、当初予定より二日早く終了した。調査は県文化課を中心に行われたが、石斧数点のほか多くの貝類を採取。遺物は町離島振興総合センターに保管されており、近く洗浄作業に入る予定。調査結果は、最終的に報告書を作成し記録保存を図る、としている」と、記載されている。

### 27. マーレー貝塚

南風見崎の西南、海岸低地砂丘一帯に立地している。現在キビ畑で耕作の耕起などによってほとんどが攪乱している。一帯には食料残滓の貝殻や焼石などが見られる。大原集落在住の新善一氏は、丁寧に全研磨された黒色の磨製石斧を一点採集

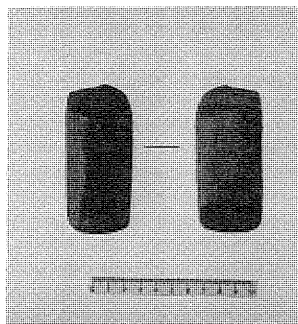


写真42 マーレー貝塚採集の磨製石斧  
(所蔵者 新善一)

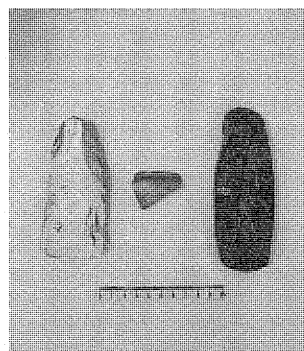


写真41 南風見貝塚群採集の石斧・シャコガイ製貝斧(未完成品)・青磁

一九八七年四月、県教育庁文化課により緊急発掘調査が行われた。調査の結果、未報告ながら新聞<sup>84)</sup>によると「近く遺物の洗浄作業△南風見貝塚▽発掘調査終わる」の見出し

している。

### 28. 仲間第一貝塚

仲間川河口の北岸、大富集落に通ずる県道の両側の古砂丘上に立地している。一九五五年多和田真淳氏による試掘調査が行われ、その際に約一メートルの貝層から船釘<sup>85)</sup>が一点出土した。また、一九五九年、早稲田大学八重山学術調査団(代表滝口宏・西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚)による発掘調査が行われた。調査の結果、石器では、打製石斧三点、半磨製石斧一点、磨製石斧四点、未製品の石斧一点など石斧が一九点、他に敲石五点、砥石三点などが出土した。報告書には「(略)自然遺物としては、貝類はシレナシジミを最多として、他に鹹水産貝類が含まれる。それに魚類、爬虫類、獣類の遺存骨が包含されていたが、特にイノシシの遺存骨の出土量は多かった。その他、岩石、灰、炭が検出され、焼石の出土が夥しかった。人工遺物としては、石器類のほか他の加工品を発見することができなかった。土器は一片も検出されなかった。石器のうち石斧が主体を占めているが、これらは、下田原、仲間第二貝塚出土のものと比較すると、製作上の差異がある程度うかがわれる」と記載されている。全国でも類稀な新石器時代の無石器期の貝塚ということで一躍脚光をあびることになった。

また、仲間橋梁改修工事にかかる史跡の現状変更の調整のため一九八九年二月二七日から三月三一日まで県教育庁文化課によって緊急発掘調査が行われた。調査の結果、石器が九点(石斧三点、敲石六点)。貝製品

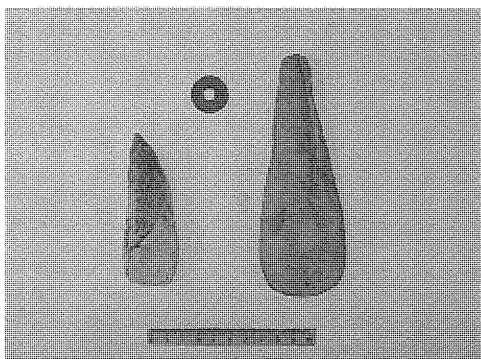


写真43 仲間第一貝塚採集のシャコ  
ガイ製貝斧、開元通寶



写真44 仲間第一貝塚の近影

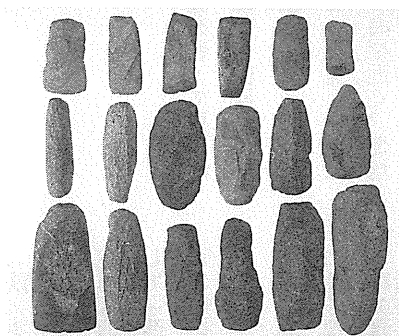
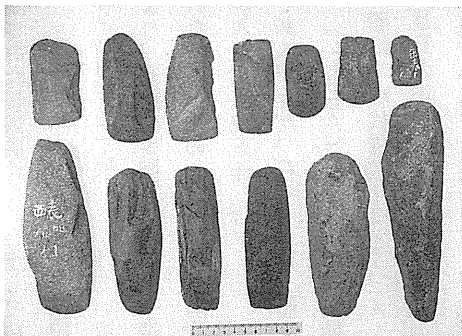


写真45 仲間第一貝塚採集の磨製石斧、半磨製石斧

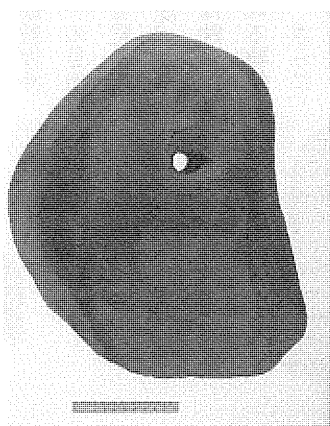
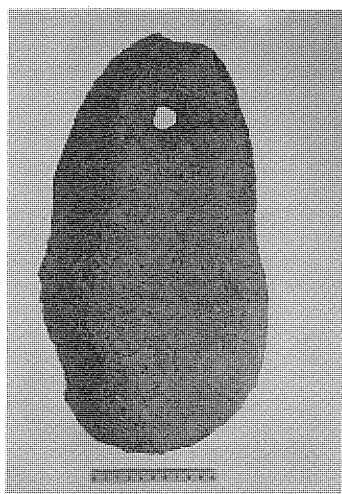


写真46 仲間第一貝塚採集の石錘（イカリ石）



は二枚貝有孔製品の一点、円盤状貝製品の未製品と判断された貝殻破片資料が一点出土した。

筆者はアミノケー（湧水）や船着場付近からシャコガイ製貝斧を一点、船用のイカリ石（石錘）四点、砥石一点を採集した。また、道路の東側のキビ畑から中国の唐銭貨「開元通寶」三枚が採集された。その内の一枚には背面に鑄造地の江南道福州の「福」という一字が入り、八四五年に補鑄された紀地銭とか会昌開元銭とか称されるものである。また、石鏃<sup>91</sup>、スイジガイ製利器<sup>92</sup>などが採集されている。昭和三一（一九五六）年一〇月一九日に県の「史跡」の指定を受けた。鉄製の船釘や唐代貨銭「開元通寶」の出土や炭素14測定法の二二五〇±六五年BPの年代から七世紀頃から九世紀後半頃の無土器時代の遺跡と比定されている。本遺跡の炭素14測定の結果は次の通りである。

二二〇±一〇年BP（七五〇年AD）  
二二五〇± 六五年BP

### 29. 西表野底貝塚

西表島の東北海岸、古見の赤石崎から湾内の平西小島を通して嘉佐崎の旧道を通っていくと野底崎がある。この遺跡は野底崎の北側砂丘に形成された貝塚である。食料残滓の貝殻や焼石などが露出している。多和田真淳氏は「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」の中で「発見 一九五五年 細原一男 古見部落の北方一kmの地点にあって海岸近く、畑地に無数の貝が散乱している。離焼系統の土器が得られるが石器は未だ出

土していない。新しいものと思われる」と、記載している。一九六〇年の早稲田大学編年表では薄手の土器片が採集されるので第四期に位置づけている。以前は畑地であった。現在は耕作されず荒地になっている。この一帯から大原村在住の高嶺正宏氏が磨製石斧を一点採集している。竹富町教育委員会が一九九一年頃に遺跡の範囲確認調査を行っている。

### 30. 船浦貝塚（西表島船浦遺跡）

西表島の西北海岸、船浦港より南へ四、五百メートル、当時は標高二メートルの田んぼの畦に形成されていた。一九七二年〜七三年八月にリヤード・ピアソン氏や安里進氏らにより発掘調査が行われた。

一九七三年八月二五日付の新聞によると「西表の船浦貝塚から『鉄ノミ』など発見 学会に新たな問題を提起 ピアソン助教発掘沖縄貝塚調査結果を発表」の見出しで「西表島の船浦貝塚で紀元二百年頃の地層から布が数片、さらに同一千年頃の地層からは鉄器、千五百年前のものとみられる植物の種子などが発掘された。さらに沖縄では絶滅して、現在東南アジアにしかないという、『センニ

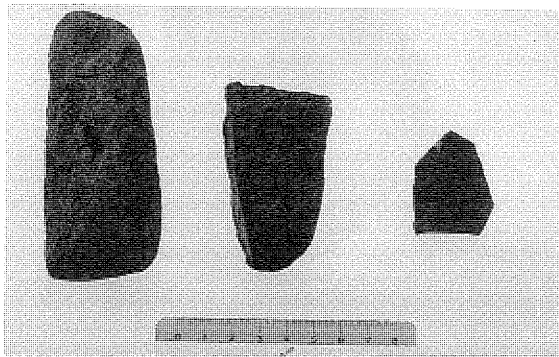


写真47 船浦貝塚採集の石斧と類須恵器

ン貝<sup>94</sup>が発見され沖繩の考古学会で注目されている。(略)この二回の調査で発掘された遺物は約四百点の人工遺物、さらにぼう大な量の自然遺物。ピアソン助教授は「自然遺物の中から、沖繩における自然環境、生活破壊の変化は千五百年前にあったと推測される。無土器文化とされている西表の船浦貝塚から、鉄ノミ<sup>95</sup>が発見されたのは、これまでの学会の場に新たな問題が提起される」と、記載されている。

調査の結果<sup>(101)</sup>、貝層は四層からなっている。また、この貝層は一メートルも堆積していて、土器が全く確認できなかった。打製石斧、局部磨製石斧、磨製石斧、貝製品、貝の装飾品などが豊富に出土した。第二層からは鉄ノミなどが出土した。また、カーボン測定では四世紀頃から一世紀頃までの年代に比定されている。遺跡の東、独立した琉球石灰岩の小丘には中世のスク時代<sup>(102)</sup>の船浦遺跡がある。

本遺跡の炭素14測定法<sup>(103)</sup>による数値は次のとおりである。

- II層 一〇一〇年AD(一〇〇〇―一世紀)
- III層 六二〇年AD(六〇七世紀)
- IV層 四二〇年AD(四一五世紀)

### 31. 塩田貝塚(西表船浦・塩田貝塚)<sup>(104)</sup>

野崎川の南側、旧製糖工場のあったところで、現在民宿が立っているが、一九六〇年頃に砂採取によってほとんどが破壊されている。所々に食料残渣の貝殻や焼石などがみられる。

沖縄大学沖縄学生文化協会の「西表島調査報告<sup>(105)</sup>」には砂岩製の自然礫

を利用した敲石などの採集が報告されている。

### 32. 上原貝塚<sup>(106)</sup>

野崎川の河口の北側から上原集落にかけての海岸低地砂丘に形成された大規模な貝塚である。一九七八年五月に西表島の遺跡巡検をした際に大規模な砂採取で遺跡が破壊されていたので、筆者は早速、竹富町教育委員会や県教育庁文化課に連絡した。その件について六月一二日付けの新聞には「砂採取は五月頃から行われたようで、大浜パトロール委員によって発見され報告を受けた県文化課は事態を重視。即座に業者に対して砂採取の中止を命じた。そして業者の調査費負担で七日に、金武・上原埋蔵文化財担当係を派遣、一〇日まで現地調査を行った。上原貝塚は、約四千五百平方メートルの広範囲にわたる遺跡。破壊状況をくまなく調査した上原担当員によると、重要な中央部が千二百平方メートル・深さ二メートルにわたってごっそり破壊されているようだ。遺物を含んでいる層は約五〇センチ程度といわれ、砂採取の場合は深く掘るために貝塚の層が全面的に破壊される。業者は「文化財とは知らなかった」と、詫びているようだが、無許可で砂を採取した罪はまぬがれない。竹富町教育委員会の文化財担当係は「今回の件は無断採取という悪質な行為なので防ぎようがない。しかし標柱を立てるなどして、二度とこのようなことが起こらないよう早急に対策を考えたい」と話している。上原貝塚は、上原部落の東(船浦方面)約百メートル行った野崎川河口付近にある貝塚。以前は整地でかなり破壊されたことがある。無土器時代の貝塚で土

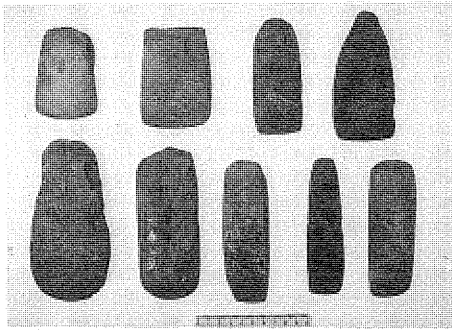


写真48 上原貝塚採集の石斧

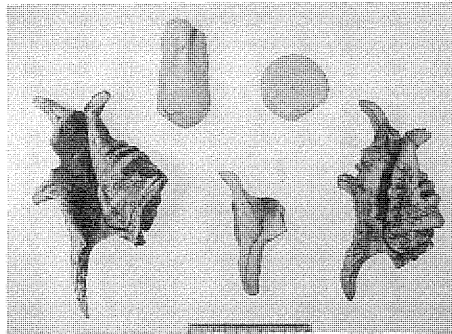


写真49 上原貝塚採集の貝製品

器が一片も出土せず、石斧、シャコ貝で作った貝斧などが多く出土する。本土、沖縄では見ることのできない特殊な南方系文化との交流を物語る貴重な遺跡とされている<sup>(108)</sup>と、記載されている。

また、一九八二年六月七日、竹富町教育委員会によって緊急発掘調査が行われた。未報告ながら新聞によると「三年ぶり調査再開 上原貝塚町が予算を組み発掘 地主に保存を求める」の見出しで「(略)これまでの調査では石斧が多く、五四年の初めての表土採掘でも石斧や獣魚骨(イノシシ、ジュゴンなど)、貝がらなどが多く採集された。今回の発掘は県文化課の金武正紀主任専門員らも加わり一〇日までに、当時、

食糧にしていたと見られるシャコ貝、クモ貝、サラサバティの貝がらが無数に見られたほか、スイジ貝、クモ貝で作った刃物替わりの(八)小道具<sup>(108)</sup>の遺物なども多数採掘された。町教委によると、同貝塚一帯約一千平方メートルが国有林を借り受けた個人有地のため、今回の発掘は、約一週間の調査成果を踏まえ地主に保存を求めていくとともに、同貝塚の具体的な範囲などを目的」と、記載されている。

筆者の地表調査によってこれまでに柱状ノミ型磨製石斧やシャコガイ製貝斧、スイジガイ製利器、イモガイ製装飾品、イノシシ、ジュゴンの骨などが採集されている。

### 33. 上原部落内遺跡

西表島上原村在住の民宿「うえはら館」の主人崎枝義錦氏によって敷地内からシャコガイ製貝斧が二点採集された。このシャコガイ製貝斧を県教育庁文化課の岸本義彦氏、西銘章氏が『南島考古だより』第51号に資料の紹介をしている<sup>(109)</sup>。集落一帯に焼石や食料残渣の貝殻などが散布している。無土器時代の貝塚である。

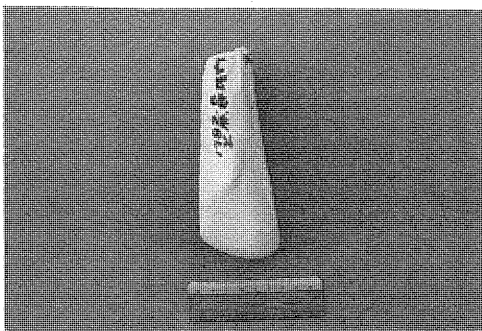


写真50 上原部落内遺跡採集の貝斧  
(所蔵者：森本孝房氏)

## 34. カータダ川河口貝塚

上原小学校より東、カータダ川河口の砂丘に形成されている。

筆者は食料残滓の貝殻や焼石などに混じてスイズガイ製利器を一点採集した。一九九〇年頃の宅地造成などにより破壊された。

## 35. 中野貝塚

中野公民館から北の元パイン工場にかけての県道北側砂丘上の広い範囲にわたって食料残滓の貝殻などが散布している。この一帯から筆者はスイズガイ製利器を一点採集した。無土器時代の貝塚と思われるが住宅地域なので性格が不明である。

## 36. 中野西崎貝塚

中野集落の北へ一〇〇メートル、県道沿いの東側の砂丘に形成されている。一九八〇年頃から大規模な砂採取が行なわれ遺跡が全壊している。西表島の浦内集落在住の森本孝房氏によってこの一帯から磨削斧石斧やシャコガイ製貝斧が数点採集され、このシャコガイ製貝斧は森本孝房氏、県教育庁文化課の岸本義彦氏と西銘章氏らによって「西表島中野西崎貝塚から発見されたシャコガイ製貝斧<sup>(10)</sup>」というタイトルで報告されている。

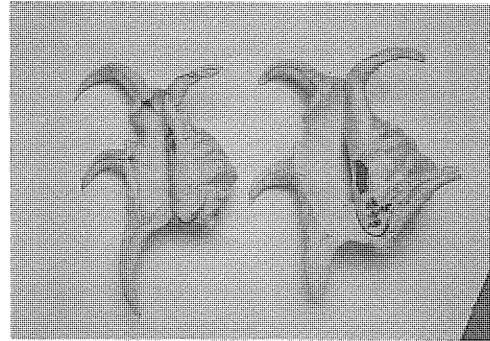


写真51 スイズガイ製利器（右：カータダ川河口貝塚、左：中野貝塚）

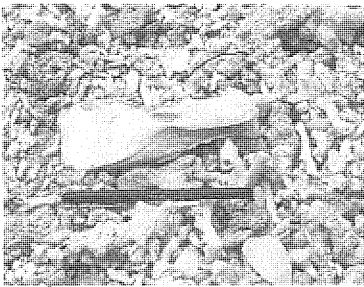


写真52 シャコガイ製貝斧の発見状況

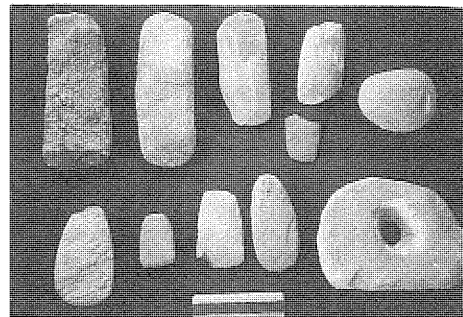


写真53 中野西崎貝塚採集の石器  
(所蔵者：森本孝房氏)

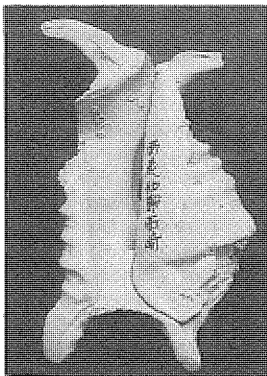


写真54 中野西崎貝塚採集のスイズガイ製利器

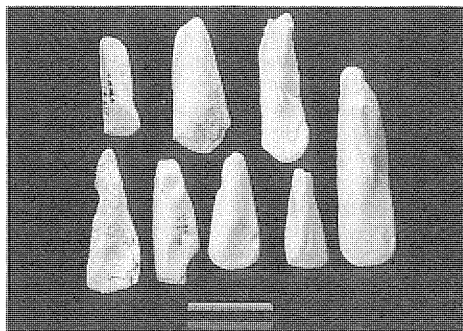


写真55 中野西崎貝塚採集のシャコガイ製貝斧  
(所蔵者：森本孝房氏)

一九九五年、筆者は大吞善晃氏、松本貢氏らとの西表遺跡巡検の際に、シャコガイ製貝斧<sup>(11)</sup>、スイズガイ製利器、磨石などを採集した。

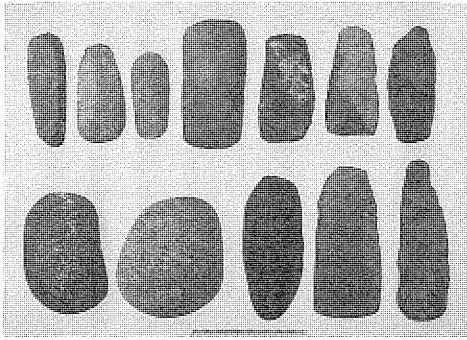


写真56 鹿川ウブド浜遺跡採集の石斧、敲石



写真57 鹿川ウブド浜遺跡の近景

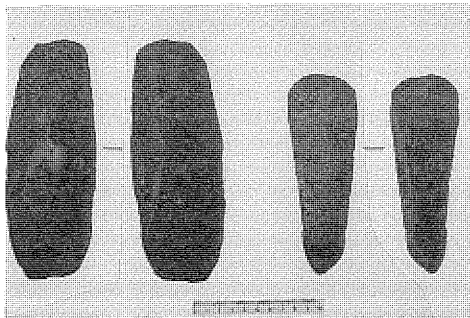


写真58 鹿川ウブド浜遺跡採集の大型磨製石斧（表・裏）



写真59 砂岩製の砥石

### 37. 鹿川ウブド浜遺跡

西表島の西南海岸、鹿川湾の南側の岬を落水崎と呼び、その手前にウブド川が流れている。その河口の浜辺一帯の礫浜に本遺跡は立地している。一九八二年の夏、生徒と一緒に西表島の西部から東部へ南岸に沿って徒歩での踏査を行った。以前に鹿川海岸から石斧が発見されるという話を聞いていた。船浮村に寄った際に船浮小中学校が所蔵している石斧を見せてもらった。ほとんどがローリングしていた。鹿川では海岸を綿密に調査し、湾の落水崎一帯から黒っぽい石を拾った。よく見ると近くにない硬い石である。一帯には石材の緑色片岩などの石に混じって、石製ハンマー（敲石）が二点、一抱えの大型の砂岩に両面に凹みがみられる砥石、未完製品の打製石斧や・完成品の磨製石斧を数一〇点採集した。石斧のほとんどが全研磨に近く、研磨技法などにより無土器時代の石斧製作跡と思われる。

### 小浜島

38. ウリンダ貝塚（泊遺跡<sup>(113)</sup>）、トマリ貝塚<sup>(114)</sup>、トナリ貝塚<sup>(115)</sup>・トゥマール貝塚<sup>(116)</sup>  
 栈橋より二〇〇メートル余り、島の中央の集落へ通じる道路の北側、製糖工場の後ろ標高一メートル前後の海岸低地の砂丘に形成されている。北側と西側は水田になっている。湧水がウリンダカーラになって流れ、トゥマール浜に注いでいる。一帯には食料残滓の貝殻や焼石などが散乱している。包含層はかなり厚いと思われるが、現在はキビ畑になっている。筆者は島の北海岸一帯に産出する閃緑岩や輝緑岩などの岩石を素材

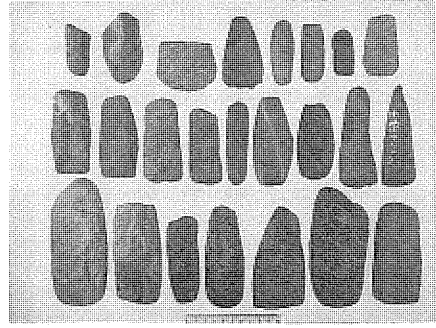
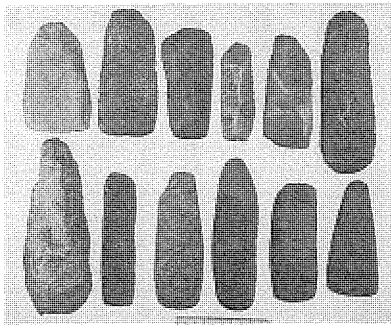


写真60 ウリンダ貝塚採集の半磨製石斧、磨製石斧

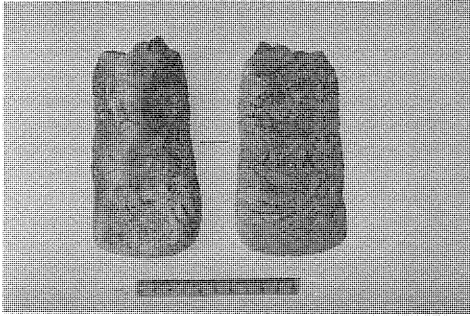


写真61 ニシンダ塚採集のシャコガイ製貝斧

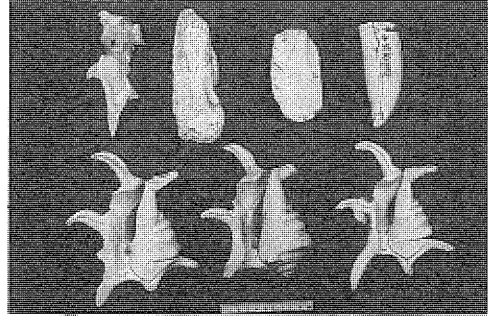


写真62 ウリンダ貝塚採集の貝製品（シャコガイ製貝斧、スイジガイ製利器）、食料残滓マッコウクジラの臼歯

にした磨製石斧、半磨製石斧、局部磨製石斧を数一〇点採集したほか、スイジガイ製利器、シャコガイ製貝斧（未完成品）も見つけた。また、マッコウクジラの臼歯も一点採集した。

一九六九年、本貝塚を最初に発見した人は玉城盛勝氏である。氏は「八重山小浜島泊遺跡採集石器について」の論文で遺跡名を「泊遺跡」<sup>(117)</sup>として報告している。また、沖縄県教育委員会の『竹富町・与那国町の遺跡―詳細分布調査報告』では、「※『沖縄県の遺跡分布』、（沖縄県教育委員会、一九七七年）中のトナリ貝塚はトマリ貝塚の誤認、名称は現地で呼ばれているようにトゥマールと称したほうがよい。さらに同報告に泊遺跡が記載されているが、これはトゥマール貝塚そのもので、削除する」旨が<sup>(118)</sup>報告されている。しかし、現地では南側のニシンダを含めた浜一帯の広い範囲をトゥマールと呼んでいる。その一部である本遺跡一帯の地名は「ウリンダ」と呼ばれているので筆者はその名称で呼びたいと思う。

### 39. ニシンダ貝塚（ニシンダ原遺跡<sup>(119)</sup>）

ウリンダ貝塚の道路を挟んで南側、一帯の海岸よりの低い砂丘に形成されている。所々に食料残滓の貝殻や焼石などが見られる。現在キビ畑になっていてトラクターによる耕起でほとんどが攪乱されている。筆者は地表調査によりシャコガイ製貝斧と敲石を一点ずつ採集した。

40. ハインダ貝塚（小浜島南風原遺跡<sup>(120)</sup>）

小浜島の南海岸ハインダから、ハイバナにかけての、東西一周道路に沿った海岸低地砂丘に形成されている。ほとんどが攪乱されていて貝殻や焼石などが所々に見られる。畑から採取した食料残滓の貝殻や焼石などが畦に積まれている。

## 波照間島

## 41. 大泊浜貝塚

波照間島の北海岸西端の標高八メートルの湾内にある奥行約六〇メートル、半径約一〇〇メートルの半円形の海岸低地砂丘に形成されている。本貝塚は一九八三年〜八五年に、下田原地区土地改良に伴う遺跡の範囲の確認調査の際に県教育庁文化課によって発掘調査が行われている。

調査の結果<sup>(121)</sup>、礫床住居跡、礫敷炉跡、埋葬人骨跡などの遺構が検出された。第四層からは中国製の薄手白磁端反り碗や白磁玉縁碗、褐釉陶器、須重器（徳之島のカムイヤキ系陶器）、滑石製石鍋（長崎県西彼杵半島産）、鉄鑿などが一点ずつ出土した。また、局部磨製石斧六点、敲石一点、骨製品、貝



写真63（沖縄県教育委員会『下田原貝塚・大泊浜貝塚』1986年、注121より）

製品としてスイジガイ製利器、ホラガイ有孔製品、シレンシジミ有孔製品、ヤコウガイ製貝匙、イモガイ製裝飾品なども出土している。

隣接して琉球石灰岩低丘陵上には、赤色土器時代の下田原貝塚がある。また、後方の標高二五メートルの石灰岩の海岸段丘にはスク時代のブリブチ遺跡がある。

本遺跡の炭素14測定法<sup>(122)</sup>の結果は次の通りである。

- 第六層 一三五〇±七五年BP（木炭）
- 第一〇層 一七七〇±七〇年BP（木炭）
- 第一一層 一五六〇±七〇年BP（木炭）

## 鳩間島

## 42. 大泊貝塚

多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺（一）」には「鳩間小学校のグラウンド拡張工事の際に安山岩製の打製石斧と粘板岩製の磨製石斧が一点ずつ採集された<sup>(123)</sup>」と、報告されている。

一九九五年 竹富町教育委員会によって、発掘調査<sup>(124)</sup>が行われた。

一九九三年夏、筆者も本遺跡をくまなく踏査したが焼石は見当たらなかった。海岸には拡張工事の際捨てられたオオシヤコガイ、サラサバテ、ヤコウガイなどがあったが焼石などは確認できなかった。また、地元の人たちの話によるとグラウンド拡張工事の際に貝殻の中から「勾玉」を拾ったということである。もしかしたら中世のスク時代から近世の浜降りや潮干狩りなどの際に貝類の解体作業や抜き身などをして食料残滓の貝殻

などを捨てた場所であるのかもしれない。検討が必要である。

### 竹富島

#### 43 カイジ浜貝塚

竹富島の西海岸、西表島や黒島、上地島がみえる標高三メートルの海岸低地の砂丘に形成されている。本遺跡では、第一次発掘調査が一九九一年九月七日～一月八日、第二次発掘調査が翌年の九月七日～一月八日にかけて県教育庁文化課によって行なわれ、その補足調査が九三年二月二日～二七日にかけて行なわれた。

調査の結果、報告書によると、「本貝塚は大きくみて二つの時期に分けられる。最初に、下層に無土器の貝塚が形成され、その後上層へ新里村式土器や中森式土器などを包含する層が堆積していることが層位的に確認されている」と、記載されている。また、報告書抄録の項には、「新石器時代無土器の貝塚からは主な遺構として掘建柱の建物三棟、ストーンボイリング一基、地炉二基、局部磨製石斧二点、叩き石二点、鉄釘（船釘）一点、土器が無い。また中世の集落、掘建柱の建物一棟、地炉三基、列状遺構一基、主な遺物として鉄器、土器、白磁、青磁、須恵器（徳之島のカムイヤキ系陶器）、褐釉陶器、羽口、磨石、土製品、貝製品。貝塚と集落の包含層が重なって堆積する複合遺跡」と、報告されている。

本遺跡の炭素14測定法による数値は次の通りである。

第三層 九二〇±七五年BP（ヒレジャコ）

八七〇±七五年BP（シャゴウ）

第四層 一四八〇±七五年BP（シレナシジミ）

一八五〇±七五年BP（シレナシジミ）

### 与那国島

#### 44 大泊浜貝塚

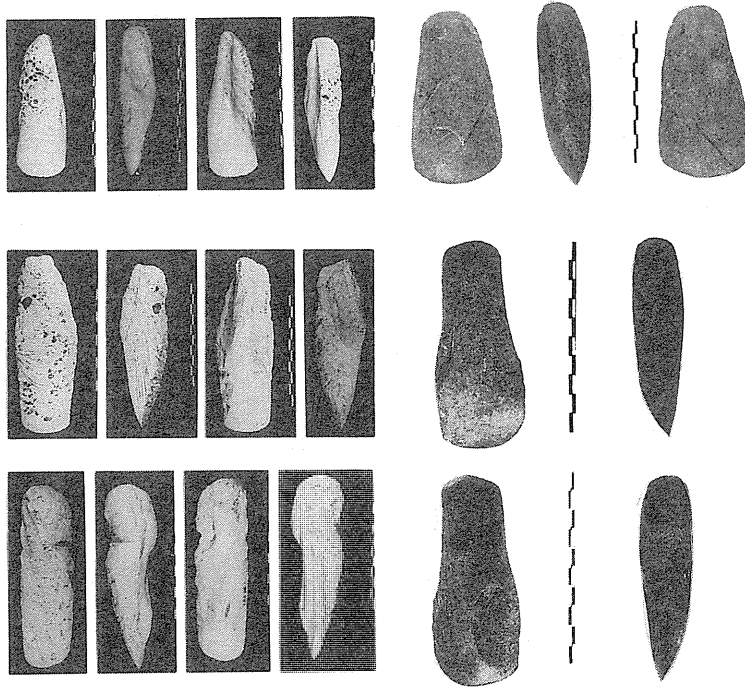
与那国島の東端、東崎の西へ一・二キロメートルの大泊浜の海岸砂丘上に形成されている。沖縄県教育委員会『竹富町・与那国町の遺跡―詳細分布調査報告書』には「砂丘の発達がよく地表面での観察では貝塚との判断がつき難い。採砂によって露呈した断面を見ると表土下二～三メートルの深さで軽石を含む厚さ三〇センチメートル前後の帯状の黒色砂層が確認できる。この包含層より夜光貝、獣骨、魚骨等を少量採集した。無土器時代の貝塚の可能性が強いが判然としない」と、報告されている。

### 宮古島

#### 45 長間底遺跡

宮古島の北東側の城辺町と平良市の境界線のある長間底と呼ばれる入江の海岸砂丘に立地している。一九八一年一月、県教育庁文化課が宮古地区遺跡詳細分布調査事業を実施した際に発見した遺跡である。一九八三年五月に県教育庁文化課によって発掘調査が実施された。調査の結果、局所磨製・磨製石斧が九点（完形品七点）、磨石二点、敲石三点、シャコガイ製目斧が一三点（ちようつがい部利用型の目斧九点、肋部利





用の貝斧一点、種不明の貝斧一点、貝斧類似貝殻片二点）、二枚貝の楕円形貝製品一点、ホラガイ腹面有孔製品一点、シャコガイ有孔製品、スイジガイ付刃突起製品（スイジガイ製利器）四点、骨製品としてイノシシの牙を加工したものと一点、イノシシの四肢骨を利用した骨製錐が五点出土している。この遺跡発見は八重山地域との文化の共通性を明確にし、

写真64 宮古島長間底遺跡出土のシャコガイ製貝斧、磨製石斧  
（沖縄県教育委員会『長間底遺跡』1984年、注128より）

宮古地域初の無土器時代の遺跡の存在を裏付けたものであり、貴重な遺跡である。

#### 46. クマザ貝塚

長間底遺跡の東、海岸の低地砂丘に形成された貝塚である。この貝塚は東西約三〇〇メートル、南北約七二メートル程に広がっている。若干の土器片とシャコガイ製貝斧などが採集されている<sup>(129)</sup>。後方には標高約七五メートル前後の丘陵が続き、その丘陵の一角にスク時代のクマザ上方原台地遺跡がある。

#### 47. 浦底遺跡

宮古島の北東の福北集落の北側の標高三・六メートルの海岸寄りの低砂丘上に形成されている。一九八七～八八年に城辺町教育委員会によって発掘調査が行われた。調査結果は未報告<sup>(130)</sup>ながら、石灰岩礫の焼石、磨製石斧が二点、骨製品としてイノシシの牙やサメ歯を穿孔したものが数点ずつ、マガキガイ製の螺旋部を利用した円盤の装飾品や豊富なシャコガイ製貝斧が二〇〇点も出土した。また、カーボン測定では無土器時代最古の約二千五百年頃という年代がでている。

これまでの炭素14測定法<sup>(131)</sup>による結果は次の通りである。

第三層 ① 一八八〇±七五五年 BP

② 二一八〇±七五五年 BP

③ 三二〇〇±七五五年 BP

第IV層 ④二三四〇±七五五年BP

⑤二五二〇±八〇年BP

48. 荒牛遺跡（新生遺跡<sup>(132)</sup>）

新城集落の北東、標高約四〜六メートルの弧状の海岸低地砂丘に立地している。盛本勲氏は『沖縄県・城辺町高腰城跡範囲確認調査報告書』（一九八九）「第二節 周辺の遺跡」のなかで「遺跡は、砂丘のほぼ全域に広がっており周辺には貝殻等が散在している。人工品としてはスィジガイ製石器、オニコブシガイ製石器等の採集がある（上原一九八五）。また、浜堤の一部では僅少なから土器片も採集されている。なお、前記の上原の論文、および沖縄県教育委員会発行の「宮古の遺跡」では、当該遺跡名を「新生遺跡」と扱っているが、これが誤記であるため前記のように訂正する<sup>(133)</sup>」と、報告されている。

現在のところ、無土器時代の貝塚が宮古島は四カ所、八重山では四四カ所（石垣島に二五カ所、西表島一二カ所、小浜島三カ所、波照間島一カ所、竹富島一カ所、鳩間島一カ所、与那国島一カ所）の計四八カ所が確認されている。

これらの貝塚の特徴は、包含層（生活層）が薄く、また、必ずといってよいほど海岸低地砂丘に立地していることである。包含層が薄いために耕作などが原因で、ほとんどの貝塚が攪乱されているのだが、そのことを口実に最低限の記録保存さえもなされぬまま、砂採取業者による破

壊の浮目にあっている。砂採取により何千年もの歴史を秘めた貝塚のほとんどが破壊され、消滅しているのである。こうした状況を見ると、研究者として心が痛む。